

愛知医療学院大学紀要

第2号

Bulletin of AICHI Medical College of Rehabilitation

巻頭言

愛知医療学院大学 副学長
山田 和政

近年、超高齢社会の進展に伴い、保健・医療・介護を取り巻く環境は大きく変化しています。リハビリテーションに求められる役割も、従来の機能回復を中心とした医療モデルから、生活機能の維持・向上や社会参加の促進を重視した包括的な支援へと拡大しています。このような状況の中で、リハビリテーション専門職には、専門的知識・技術に加え、多職種連携や地域との協働を実践できる能力が一層求められています。

本学においては、臨床現場を想定した実践的教育の推進に加え、数理・データサイエンス・AI 教育の導入など、新たな教育手法を取り入れながら、学生の主体的な学びを支援しています。また、地域との連携を重視した取り組みを通じて、地域社会に貢献できる人材の育成にも努めています。

本紀要は、本学における教育・研究の成果を広く発信するとともに、リハビリテーション分野の発展に寄与することを目的として刊行するものです。本号は、原著2編、短報2編、活動報告3報から構成されており、各論文はいずれも各職種の現状における課題や目標、明らかとなった問題点について考察した意義深い内容となっています。本号に掲載された成果が、今後、専門学会等での発表や論文投稿へと発展していくことを期待します。

令和8年3月吉日

目 次

巻頭言

【原著】

第一次長州征伐における尾張藩「に」組の往路と復路 3
内藤 通孝

卒業前効率化学習プログラムの取り組み 11
廣渡 洋史，渡邊 豊明，加藤 真夕美，清水 一輝，外倉 由之，松田 裕美，
小山 隆幸，横山 剛，加賀谷 繁，岩井 和子，石井 文康

【短報】

短時間研究プレゼンテーションを用いた教員向け研修会が
研究モチベーションに与える影響19
齊藤 誠，山森 孝彦，加藤 真夕美，藤本 大介，松浦 智美，齊藤 寛子

介護予防事業における革細工プログラムは高齢者に
どのような「楽しさ」や「辛さ」を引き起こすか24
加藤 真夕美，外倉 由之，清水 一輝

【活動報告等】

リハビリテーション専門職養成課程における数理・データサイエンス・AI 教育
(MDASH)の質保証と学修支援 ー生成 AI を用いたリフレクションペーパーの分析と
学習者の理解度に応じた復習計画の提案ー35
田中 雅章，山田 和政

大治町 100 歳大学における作業療法学専攻教員による取り組みの紹介44
清水 一輝，外倉 由之

「清須市民げんき大学」のレクリエーション演習における
「楽しさ」を構成する要因49
外倉 由之，加藤 真夕美，清水 一輝

【学生研究】

卒業研究論文 第 16 巻 令和七年度59

[投稿規定]

愛知医療学院大学 紀要投稿規定

.....63

編集後記

[原著]

第一次長州征伐における尾張藩「に」組の往路と復路

内藤 通孝

愛知医療学院大学 リハビリテーション学部 理学療法学専攻

Going and Returning of the Owari Domain "Ni" Group in the First Conquest of Choshu (1864–1865)

Naito Michitaka

【要旨】

第一次長州征伐に際して征長総督に任ぜられた尾張藩の元藩主、徳川慶勝軍勢の後方支援のため、中島郡平野村（現・愛知県稲沢市平野町）の伊藤佐右衛門らは「に」組の人夫繰込方肝煎を命ぜられた。佐右衛門らは18か村からの48人を引き連れ、1864年10月21日、広島に向けて出立した。往路は陸路を進み、11月21日、広島に到着した。長州藩の降伏により12月26日には帰国の命を受け、復路は大坂まで海路を進むよう指示されたが悪天候が続き、已むなく備前国片上（現・岡山県備前市片上）に上陸して陸路を進み、翌1865年1月23日に帰村した。

キーワード：第一次長州征伐 尾張藩 中島郡平野村 伊藤佐右衛門 人夫繰込

【はじめに】

250年に及ぶ長きに渡って天下泰平の世を享受した江戸時代には、士農工商の身分制度のもとで農民（百姓）は戦争とは無縁の存在であったが、江戸時代も末期になると幕府の権威が揺らぎ、動乱の時代に突入した。尾張国中島郡平野村においても、農民は道路・河川などの普請、あるいは朝鮮通信使や琉球使節の美濃路通行に際して稲葉宿に助郷として夫役に駆り出されることはあっても、戦争に関わることはなかった。しかし、江戸幕府の地位が揺らぎ、1864年7月に京都で「禁門の変」を起こした長州藩を征伐する名目で尾張藩が出陣することになり（第一次長州征伐）、平野村など中島郡の村々の農民も後方支援とは言え、戦争に駆り出されることとなった。

【第一次長州征伐】

1863（文久3）年3月、平野村の伊藤佐右衛門¹⁾と稲葉村の山田藤蔵は、18か村から48人の人夫（平野村の1人を含む）を揃えるように命じられた。この頃、黒船来航（1853）・日米修好通商条約（1858）、桜田門外の変（1860）、公武合体・和宮下向（1861）、生麦事件（1862）・薩英戦争（1863）と世相は慌ただしく動いていた。この間の事情は明らかでないが、幕末の動乱期には戦争などの非常事態に備えて百姓の動員が準備されていたと考えられる。本論文では、伊藤家文書²⁾をもとに長州征伐に随行した経緯と行程を明らかにした。

- 1) 伊藤佐右衛門 (1818~?) : 幼名を善九郎と言ひ、平野村の庄屋、内藤弥左衛門 (1784~1872) の長男世嗣であったが、同村の豪農、伊藤佐右衛門 (1796~?) の養嗣となり、先代と同じく佐右衛門を名乗った (図 1)。
- 2) 伊藤家文書 : 『新修稲沢市史』 編纂に当たり、伊藤稔男 (稲沢市平野町, 図 1 参照) が提供した古文書。活字起こしされて同資料編十三『近世地方四』 (稲沢市, 1988 年発行) に収録されている。本論文では、これを底本として使用し、著者の恣意で原文に注釈と振り仮名を付した。

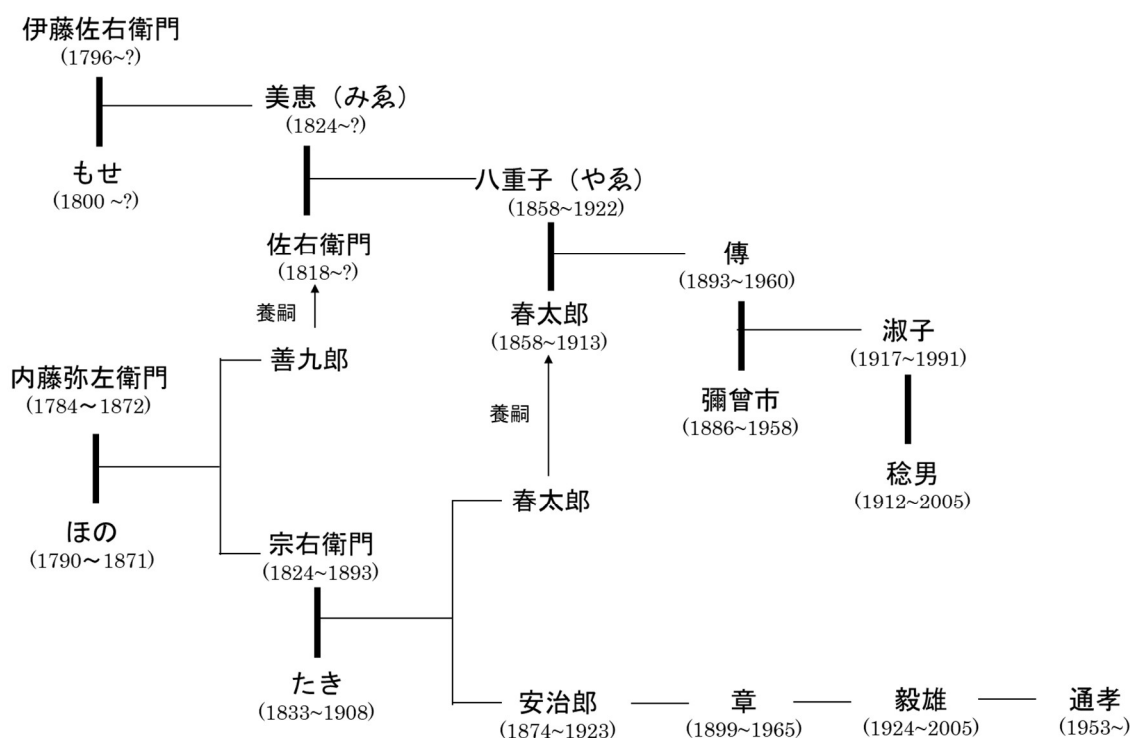


図 1 伊藤家系図

【村々への仰渡書と請書】

伊藤佐右衛門らは、尾張藩の命を「仰渡書」で村々へ通達し、それを受けて村々の代表者は「請書」を出した (伊藤家文書 146)。

佐右衛門ら肝煎は、「仰渡書」において、村々の役人 (庄屋) に対して尾張藩の軍勢が出勤する際に支障がないように人夫を確保し、病気などの者が出た場合には代人を立てて名前を肝煎に届け出るよう段取りし、火急の場合に支障がないように精々心掛けることを求めている。

それに対し、村役人達は「仰渡書」の内容を承知し、人夫には丈夫な者を選んで名前を報告し、交代するときは届け出て、期に臨んで支障がないように日頃から準備しておくこと、愈々出勤の時には弁当三食分を持参させ、肝煎とともに新川橋まで進み、清須陣屋の手代による人数の確認を受けること、百姓本来の責務である耕作について手抜きがないよう、村々に残った者が田畑の世話をすること、および村役人が引退するなど交代すると

きには確実に申し継ぎ、支障がないようにすることを確約している。

以下に左右衛門らの「仰渡書」と村役人達の「請書」の原文（伊藤家文書 146）を示し、注釈を加えた。

仰渡書

御軍勢¹⁾被差向候節、別紙村々人夫^{くりこみかたきもいり}繰込方^{くりこみかた}肝煎^{かんせん}申付候間、村役人共示合、期ニ臨ミ差支無之様、嚴重^{しじまり}之締^{もし}相立置、若人夫之内病氣等之者有之候ハ、代り人名前等其方共江可申届間、篤与手番^{とくとてつがい}等³⁾申合、火急ニ可申語候間、差支無之様、精々可心懸候、仍右壺通相渡候

文久三⁴⁾

亥三月

稲葉村 山田藤蔵
平野村 佐右衛門

一、夫四拾七人⁵⁾

内

(略)

壺人 ○平野村

(略)

乍恐御請書奉差上候御事

御軍勢御差向之節、人夫繰込方之儀、御請次第遅刻等無之様人数引連可罷出旨、手番⁵⁾等万端肝煎之者とも篤与示合置、尤人別名前帰村次第取極、明後廿日迄ニ書付を以御達可申上旨、被仰渡、奉畏候

一、前頭人夫之儀、^{じょうぶ}丈夫成者相撰、右名前肝煎共手前へ相届、守番相替り候ハ、肝煎手前へ相届置、期ニ臨ミ差支無之様、常々嚴重^{しじまり}之締^{もし}取計置候様被仰渡、奉畏候

一、^{いよいよ}弥人夫罷出候節ハ^{そとかたはみその}弁当両三度振所持為致、^{ちやうじやまち}外片端御園町⁷⁾方長者町⁷⁾迄之内へ肝煎共申合、^{ひきまとい}引纏⁶⁾罷出、御差^{したが}図ニ随^いひ繰出候様被仰渡、奉畏候

但本文之通ニ付而ハ、弥出張之節ハ陣屋手代新川橋へ出張⁸⁾、着張⁹⁾人数相改可申候間、右場所ニ相揃居可申旨御仰之趣奉畏候

一、右之通ニ付而ハ人夫罷出候跡、要務之耕作手拔不相成様、私共方精々世話可仕旨、被仰渡、奉畏候、已後、村役人共進退之節々遺失無之様篤と申繼、永々之御備^{おそなえ}ニ相成候様可仕候、仍御受書奉差上候、以上

文久三

亥三月

中嶋 嘉十郎
石橋 熊吉
桜木 勇助
稲葉 内田武右衛門

1) 尾張藩の軍隊 2) 世話役 3) 段取り 4) 1863年

- 5) 伊藤家文書 147 (1863年4月) と伊藤家文書 149 (1864年7月) では、佐右衛門らが率いる「に」組は48人となっている。「い」組から「ち」組まで計8組で総勢477人だが、「い」51人、「ろ」58人、「は」51人、「に」48人、「ほ」68人、「へ」63人、「と」65人、「ち」63人となっており、合計は若干合わない。「ほ」は68人であるが6の横に7、「へ」は63人であるが3の横に4と書き込みがある。「ほ」を78人とし、「へ」を63人のままにすると合計と合致する。
- 6) 取りまとめる。7) 現・名古屋市中区 8) 清洲陣屋 (代官所) の小吏である手代が新川橋 (現・清須市土器野) へ出張する。9) 出張の誤りか。

【第一次長州征伐における「に」組の行程】

1864年、尾張藩の元藩主、徳川慶勝 (1824~1883) は第一次長州征伐の総督に任ぜられ、10月14日に名古屋を発駕した。藩命を受けて佐右衛門らは、10月21日に人夫らを引き連れ、広島に向けて出立した。往路の行程は詳しくないが、10月21日に稲葉宿を出立し、26日に大坂に着いた。準備を整えた後、11月6日に大坂を立ち、11月21日、広島に到着した (図2)。何をどのような手段で運搬したかの記述はなく不明であるが、食料、衣料、寝具、調理・食事用品などの日用品を大八車や長持^{ながもち}などで運んだのであろう。武器が含まれていたかも不明である。

長州藩は幕府軍の諸条件を受諾し、12月には戦わずして降伏した。12月26日には「御小荷駄付悠夫国元江御返し之旨被仰付候」と帰国の命が下り、さらに27日には「明廿八日出帆可致旨被仰出候」と指示があり、29日に「廣嶋出帆」した。復路は「藝地¹⁾大坂迄渡海」と大坂までは海路を進むよう命ぜられ、瀬戸内海の島々を含む湊々に寄港しながら航行したが、悪天候に阻まれて思うように進めず、やむを得ず備前国片上^{かたかみ}に上陸した。その後は陸路を進み、1865年1月18日、大阪に到着、1月23日、平野村に帰村した (図3)。

以上の顛末は、1865年2月に清須代官、下方弥七郎 (在任期間1864年7月20日~1865年8月23日) に対し、「中々以筆紙ニ難尽御座候付、前頭荒増御達申上候」と報告している。

- 1) 藝地：安藝國 (安芸国)。現在の広島県の一部で、廣嶋 (広島市) を含む。

【往路・復路の詳細】

往路 (表1) は、10月21日に稲葉宿を出立し、10月25日に大坂到着の予定であったが、「夫之者足痛」のため10月25日は守口宿に泊り、1日遅れて大坂に到着した (伊藤家文書150)。さらに、「御日限前頭 (10月25日到着の予定) 大坂着筈ニ付、頻^{しきり}ニせり立候付、守口宿ニ至り候処、必至草臥込^{くたびれこみ}、又ハ足痛等差発^{さしおこ}り、過半相煩^{あはれ}ひ」・・・「守口宿相泊り」 (伊藤家文書151) と、守口宿に一泊しなければならなかった理由を、疲労や足痛の者が続出したためと弁解している。

文書中には「首切之御半切」という下げ札が挿入されており、一方では「格別之働有之ものハ其次第二より御褒賞も可有之候」と褒美を仄めかしながら、他方では「逃去、又ハ不埒筋等有之者ハ召捕、吟味之上、其仕儀寄^{しぎ}、速ニ打捨候」、「其場ニ而身を隠し、追而居村へ立帰候者ハ勿論死罪ニ行ふべき」 (伊藤家文書153) と、「逃亡」、「不埒」、「雲隠れ」、



図2 往路地図

①1864年10月21日 稲葉宿出立, ②10月25日 守口泊,
 ③10月26日 大坂着, 11月6日 大坂発, ④11月21日 廣嶋着
 伊藤家文書 153 をもとに作成. ● 宿泊地



図3 復路地図

①1864年12月29日 廣嶋出帆, ②12月29日 小用, ③1865年1月1日 音戸ノ瀬戸,
 ④1月2日 長濱湊, ⑤1月4日 木谷湊, ⑥1月5日 竹原湊, ⑦1月7日 鞆湊,
 ⑧1月10日 多度津湊, ⑨1月11日 与島, ⑩1月12日 下津湊, ⑪1月13日 牛窓湊,
 ⑫1月14日 片上, ⑬1月15日 正條, ⑭1月16日 加古川, ⑮1月17日 兵庫,
 ⑯1月18日 大坂安治川, ⑰1月18日 大坂八軒屋, ⑱1月19日 伏見,
 ⑲1月20日 草津, ⑳1月21日 土山, ㉑1月21日 坂下, ㉒1月22日 四日市,
 ㉓1月23日 桑名, ㉔1月23日 佐屋, ㉕1月23日 平野村帰村
 伊藤家文書 153 をもとに作成. ● 宿泊地 ■ 立寄地

「帰村」など命令に背くと「打捨（斬り捨て）」、「死罪」など極刑に処すとされ、如何に過酷なものであったかを物語っている。

往路は、全行程を陸路であったが、帰路ほどは苦勞しなかったためか記述は少ない。稲葉宿から大坂までは、帰路と同じ佐屋宿回りの東海道を使用したと考えられる。途中、「疲勞」や「足痛」のため守口宿に泊まったので、帰路よりも1日余分に要した。大坂から廣嶋までは山陽道を通ったと考えられる。復路（表2）では、廣嶋出帆の際の御触「心得書」において、「藝地方大坂迄渡海」、「勝手次第上陸等不相成候事」とあるが、度々の雨天に難儀し、さらには「稀成大雨」に見舞われ、備前国片上宿に上陸・宿泊する羽目になった。

「船馴レ不申者とも病発」とあるので、船酔いに罹ったのであろう。往路では大坂から廣嶋まで15日であったが、帰路の廣嶋から大坂までは20日も要した（表3）。

表1 往路の詳細

西暦	日付	事項	備考	図2との対応	現在の地名との対応
1864年	10月14日	前大納言様（徳川慶勝）御発駕			
	10月21日	稲葉宿出立		1	愛知県稲沢市
	10月25日	守口泊	「頻ニせり立候付、守口宿ニ至り候処、必至草臥込、又ハ足痛等差発り、過半相煩ひ」	2	大阪府守口市
	10月26日	大坂着	予定では25日到着	3	
	11月1日	徳川慶勝 大坂へ出駕			
	11月6日	大坂出立	60車余（長持并兵糧米）		
	11月21日	廣嶋着		4	
	11月26日	国泰寺御仮建小家から出火	国泰寺には征長軍の総督府が置かれた。		広島市西区にある曹洞宗寺院
	11月30日	「御酒二樽被下候」			
	12月26日	「御小荷駄付悠夫国元江御返し之旨被仰付候」			
	12月28日	「出帆可致旨被仰出候」			

伊藤家文書 153 をもとに作成。「図2との対応」は、地図中の番号との対応を示す。

【後日譚】

この逸話には後日談がある。平野村の伊藤佐右衛門他5人は、長州征伐の功で「永世御陣屋江御年頭可罷出候家ニ被成下置」と、毎年、清須陣屋（代官所）へ年賀の挨拶に罷り出ることを許されたが、さらに1866年、清須代官、廣瀬傳三郎（在任期間1865年8月23日～1867年12月25日）に対し、「御出陣御供之儀者一命ニも可拘様心得、誰壺人御受可申上者無御座、・・・私共初御受申上、・・・」と命の危険があると誰も引き受ける者がなかったところを、私共が初めて引き受けると申し出、「一命ニも可拘と怖込、多分之賃銀差出、代人相立、又ハ鬮^{くじ}当り等ニ而無是非御用相勤候者も有之」（伊藤家文書155）と命に拘わるようなことであると多額の賃金を弾み、あるいはくじに当たるなどして仕方なく引き受けた者もあり引率に苦勞したなどとして、「苗字帯刀家付御免許被仰付被成下置候様仕度、只管奉願上候」と苗字帯刀^{ひたすら}の家付免許を願い出た。このとき既に「王政復古（1867）」や「明治維新（1868）」の直前であるが、この申請が認められたか否かの文書は残っていない。1870年には、全ての平民に対して「苗字許可令」が出された。

表2 復路の詳細

西暦	日付	時刻	事項	備考	図3との対応	現在の地名との対応
1864年	12月29日		廣嶋 出帆		1	
	同日	暁	沖嶋コヨウ 懸船		2	小用港。広島県江田島市江田島町小用(こよう)
1865年	1月1日	夕七ツ	沖嶋コヨウ 出帆			
	同日	暁	ヲントノ瀬戸湊 着船		3	音戸(おんど)の瀬戸。広島県呉市音戸町
	1月2日	朝五ツ	ヲントノ瀬戸湊 出帆			
	同日	昼八ツ半	長濱湊 入津	雨天	4	広島県呉市広長浜(ひろながはま)
	1月4日	朝五ツ	長濱湊 出帆			
	同日	八ツ半	木谷(藤扇)湊 着船		5	広島県安芸津町木谷(きだに)
	1月5日	暁	木谷(藤扇)湊 出帆			
	同日	昼九ツ半	竹原湊 掛船・繋船	雨天	6	広島県竹原市
	1月7日		備後国鞆湊 着船	雨天	7	広島県福山市鞆町(ともちょう)鞆(とも)
	1月10日	暁	備後国鞆湊 出帆			
	同日	九ツ	讃岐国多度津湊 着船	晩雨	8	香川県多度郡多度津町
	1月11日		讃岐国多度津湊 出帆			
	同日		ヨシマ 掛り船		9	香川県坂出市与島町(よしまちょう)
	1月12日		備前国下津湊 掛船	雨降	10	岡山県倉敷市下津井(しもつい)
	1月13日	夜中	牛窓湊 入津		11	岡山県瀬戸内市牛窓町(うしまどちょう)
	1月14日		上陸 備前国片上宿泊	稀成大雨	12	岡山県備前市片上(かたかみ)
	1月15日		正條宿泊		13	兵庫県たつの市揖保川町(いぼがわちょう)正條(しょうじょう)
	1月16日		加古川宿泊		14	兵庫県加古川市
	1月17日		兵庫宿泊		15	兵庫県神戸市
	1月18日	朝	大坂安治川着		16	大阪市西区安治川(あじかわ)
	同日	夜四ツ半	大坂八軒屋泊		17	大阪市中央区天満橋京町
	1月19日	夜	伏見宿泊		18	京都市伏見区
	1月20日		草津宿泊		19	滋賀県草津市
	1月21日		坂下宿・土山宿泊		20, 21	三重県亀山市関町坂下・甲賀市土山町
	1月22日		四日市宿泊		22	三重県四日市市
1月23日		桑名宿		23	三重県桑名市	
同日		宮船繰替 佐屋宿 入津		24	愛知県愛西市佐屋町	
同日	夜	帰村		25	愛知県稲沢市平野町	

伊藤家文書 153 をもとに作成。「図3との対応」は、地図中の番号との対応を示す。

表3 往路と復路の所要日数

	平野村～大坂	大坂～廣嶋
往路	5日	15日
復路	4日	20日

【おわりに】

第一次長州征伐に際して尾張藩の命で村々の百姓を組織し、後方支援に当たった平野村の伊藤佐右衛門らの苦難を、『新修稲沢市史』編纂に際して提供された「伊藤家文書」から明らかにした。

普段は農業に従事している百姓が、後方支援とはいえ戦乱に駆り出され、往路では大八車、長持などの重装備で毎日数十 km の陸路を徒歩で移動した当時の人々の体力と持久力には驚嘆する。また、復路は海路で不慣れな船旅の上（彼らは農民であり、漁民ではない）、悪天候続きで船酔いに罹ったことは想像に難くない。過酷な命令に従って任務を遂行し、無事帰村した佐右衛門らの統率力も特筆に値する。

【謝辞】

古文書の解読にあたり懇切丁寧な御教示を賜った椙山女学園大学人間学・ジェンダー研究センターの富田和子氏に深謝する。

卒業前効率化学習プログラムの取り組み

廣渡 洋史¹⁾ 渡邊 豊明²⁾ 加藤 真夕美²⁾ 清水 一輝²⁾ 外倉 由之²⁾
松田 裕美²⁾ 小山 隆幸²⁾ 横山 剛¹⁾ 加賀谷 繁¹⁾ 岩井 和子¹⁾
石井 文康¹⁾

- 1) 愛知医療学院大学 リハビリテーション学部 作業療法学専攻
2) 愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

An Initiative for a Pre-Graduation Efficiency Learning Program

Hirawatari Hirofumi Watanabe Toyoaki Kato Mayumi
Shimizu Kazuki Tokura Yoshiyuki Matsuda Yumi
Koyama Takayuki Yokoyama Tsuyoshi Kagatani Shigeru
Iwai Kazuko Ishii Fumiyasu

【要旨】

医療専門職の医師，看護師，理学療法士，作業療法士等の養成課程では国家資格取得のために卒業前には様々な学習プログラムが行われている．本学作業療法学専攻では効率的な学習プログラムの位置付けとして対策講座を実施した．受講した学生は全員資格取得に至り，その実施形態，学習内容などについての検討を行った．

キーワード： 作業療法 国家資格 国家試験 効率化学習 対策講座

【はじめに】

理学療法士，作業療法士の養成課程では国家資格取得のために卒業前にはアクティブラーニング，グループ学習，自己主導型学習レディネス，屋根瓦式教育法，動画学習など様々な学習プログラムが行われている．アクティブラーニングは学生自身が課題の発見・解決に向けて主体的に学ぶ学習ができるように行い，その学習法の複数の学生での学び合いはグループ学習スタイルとなる¹⁾．自己主導型学習レディネスは学習目標を設定し，計画を立て，自己評価して改善するといったプロセスを自律的に行うための準備を整える方策である²⁾．屋根瓦式教育法は，上級生が下級生に指導する形式で指導される側だけでなく，指導した上級生の理解向上にもつながる可能性があり，国家試験基礎科目の知識定着に有効な手法である³⁾．動画学習はある領域での動画を導入して理解度の改善を図り，国家試験対策教材として有用と報告されている⁴⁾．これらの学習法は卒業前の資格取得のために膨大な量の知識の理解と記憶の定着が求められた開発ツールである．

本学の卒業前学習プログラムは2019年度に改訂が行なわれ，改訂以前の作業療法学専攻では学生の自主性を重視し個人学習を中心に取り組んできたが，個々の基礎学力差が大きく左右する傾向にあり，改訂するために国家試験対策小委員会を設置し，理学・作業療法学両専攻ともに同一の国家試験対策プログラムとしてアクティブラーニングを用いた

1) . そして、国家試験の合格率は両専攻ともに全国平均を上回り、その後は順調に推移していたが、2023年度は作業療法学専攻において全国平均を下回った(表1)。

表1 卒業生の国家試験合格率の推移⁵⁾ ()内は全国平均

年度	回	卒業期	卒業生数	合格率 %	
2019	第55回作業療法士国家試験	10期	21	100.0	(94.2)
2020	第56回作業療法士国家試験	11期	28	92.8	(88.9)
2021	第57回作業療法士国家試験	12期	38	97.4	(88.7)
2022	第58回作業療法士国家試験	13期	25	100.0	(91.3)
2023	第59回作業療法士国家試験	14期	32	80.0	(91.3)
2024	第60回作業療法士国家試験	15期	20	95.0	(92.0)

現在の本学作業療法学専攻では、グループ学習、国家試験過去問題の徹底学習、個別指導などが実施されている。それに加えて、効率的な学習を促すために対策講座を試行しており、その実施形態、学習内容について報告する。

【対策講座の概要】

1. 実施形態

卒業約4ヶ月前より、平日はグループ学習、国家試験過去問題の徹底学習、個別指導などを行い、対策講座は主に土曜日に実施し、年末年始は29～30日、2～3日に行った。対策講座の実施時間は90分36回、計54時間実施し、その7割以上に参加した学生を受講生とした。

2. 実施内容

1) 領域

脳・脊髄疾患、精神疾患、小児疾患などの国家試験専門問題、特に実地3点問題を重点領域とした。

2) 効率化学習プログラム

本学園の創立より資格取得のための卒業前学習プログラムでは、講座方式を取り入れた時期もあり、令和年間のしばらくの間は休止している状況であった。本講座では効率化を図るよう以下の工夫を行った。

- ①能動的学習への工夫
- ②過去の国家試験問題の分析工夫
- ③動画を用いて説明・解説の工夫
- ④その他の工夫

オンラインリモート方式講座での工夫など

【結果】

本学作業療法学専攻 20名の95%にあたる19名（男性5名・女性14名，平均年齢21.0±0）が対策講座の7割以上に参加していた。2024年度第60回理学療法士・作業療法士の合格発表より、対策講座受講生19名は，全員合格することができた。

【考察】

パラメディカルの看護師・薬剤師・臨床検査技師・放射線技師・言語聴覚士の国家試験問題では理学療法士・作業療法士に設定されている実地3点問題はなく，医師国家試験問題に臨床実地3点問題が設定されている。このような状況から，療法・治療に携わる専門職は資格取得を得るためにはより高度な臨床知識を必要とすることが推測される。よって，理学療法士・作業療法士の養成課程では卒業前に様々な学習プログラムが試みられている。今回，本学作業療学科で新たに導入した対策講座では実地3点問題について効率的な理解を促す学習プログラムの可能性を迫及した。

1. 実施形態

一般的には解剖・生理・運動学，臨床医学などの専門基礎問題の理解を先行して行い，6割の正答率を目標とする学習傾向となる。本学作業療法学専攻では専門問題学習と専門基礎問題学習を平日と週末に区分けして同時進行とした。これは，臨床実習終了直後に実際の作業療法の理解を問う専門問題を臨床実習での経験を活かしながらの学習となり効率化を促すことが想定される。

2. 実施内容

今回の対策講座では，通常の講座方式の短所である教員が一方向的な知識供給をする受動的な学習内容の傾向から，中央教育審議会が推進する学生が主体的に問題を発見し解決していく能動的学習法となるように工夫することにある。

①能動的学習を促すために学生がまず国家試験問題に取り組み，教員が問題の説明・解説を簡潔に行うことで，学生が主体的に疑問を発見していく思考過程に導き，そして問題の再チャレンジで課題解決を行う自己フィードバック的な学習を繰り返して行う。その際に学生が容易に改善点に気づいて解決していく方策として問題数は数問を目安に，問題チャレンジ，教員の説明・解説，そして問題の再チャレンジを何度も反復し，国試対策講座を「一度きりの詰め込み」ではなく，「反復・自律学習 → 知識・記憶の定着」に落とし込むサイクルとした。この試みは，清島ら¹⁾の学生自身が課題の発見・解決に向けて主体的・共同的に学ぶ環境となるような学習プログラムを踏襲した。

②過去の国家試験問題の分析工夫として，問題の要約整理を行い，学習の優先順位を推測する。例として，脳画像問題では高次脳機能障害への理解の優先度が高いと思われる（表2）。原田⁶⁾は国家試験過去問題の頻出語と共起関係を可視化する学習法を報告している。本対策講座では領域別の頻出語から学習の優先順位を推奨する方法とした。

表2 過去の国家試験の脳画像問題の分析工夫 ()内は解答の症状名

	病変部位	画像	疾患	症状：解答
第50回国家試験	左：被殻	CT	脳出血	症状：高次脳（失語症）
第51回国家試験	右：下頭頂葉	CT	脳梗塞	症状：高次脳（半側空間無視）
第52回国家試験	左：側頂葉	CT	脳出血	症状：高次脳（失行症）
第53回国家試験	右：放線冠	MRI	脳梗塞	症状：高次脳（半側空間無視）
第54回国家試験	左：視床	MRI	脳梗塞	症状：運動機能（右片麻痺）

③動画を用いて説明・解説の工夫，視覚的イメージを高めて国家試験問題を解いて行く。澤田ら⁴⁾は小児分野の専門問題について障害像を動画で理解すると容易に解答できる可能性を述べている。本講座では小児分野に加えて脳卒中，脊髄損傷などの分野にも動画を用いて行った。

④その他の工夫

オンラインリモート方式の講座での工夫では受講中はLINE電話にて受講者同士が繋がり，国家試験問題チャレンジの際には疑問などの意見交流を持ちながら課題の発見・解決を促す学びとなり，グループ学習的な利点を活用した。

先行研究として卒業前学習プログラムは様々な試みがなされている。その試みを対策講座の中に取り入れながらより効率的な学習プログラムの工夫を行った（表3）。そのアウトカムとして，受講した学生には資格取得の一助となったと考えられる。

表3 国家試験対策に関する先行研究と本講座の進め方との関連性

著者 (年)	先行研究での国家試験対策の進め方	本講座の進め方
清島ら (2021)	学生自身が課題の発見・解決 アクティブラーニング＋グループワーク	清島ら(2021)のアクティブラーニングを踏襲 問題チャレンジ⇒解説⇒問題再チャレンジ
北村ら (2022)	自己主導型学習レディネス 学習目標⇒計画⇒自己評価	自己評価を促す 問題チャレンジ⇒解説より自己フィードバック
樋口ら (2024)	屋根瓦式教育法 上級生が下級生に指導する形式	教員指導 簡潔にポイントを教示し効率化
澤田ら (2024)	専門分野の動画学習 小児分野	専門分野の動画学習 脳卒中，脊髄損傷，小児分野など

【今後の展望】

今回の試みは本学での対策講座の再始動的なきっかけとなり、翌年には作業療法学専攻の全教員が専門問題の講座を計画し、専門基礎科目では理学療法学専攻・作業療法学専攻の教員による対策講座が新たに加わり、今後更なる卒業前の効率的な学習プログラムに進化して行くことが期待できる。

【結語】

本学科で行った卒業前学習プログラムは、従来のグループ学習、国家試験過去問題の徹底学習、個別指導などと対策講座とのマッチングによって、より効率的な運用となったことが示唆された。

【謝辞】

国家資格取得のために惜しみなく支援をしていただいた大学教職員の皆様に心より感謝を申し上げます。

【文献】

- 1) 清島大資, 鳥居昭久, 臼井晴信, 他: アクティブラーニングを活用した国家試験対策プログラムに対する取り組み 愛知医療学院短期大学紀要. 2021; 12: 25-31.
- 2) 北村匡大, 吉澤隆志, 岡本伸弘, 他: 理学療法学生の縦断的な自己主導型学習レディネスが国家試験に与える影響, および国家試験低得点群における学業成績と自己主導型学習レディネスの特性 理学療法教育. 2022; 2(1): 1-8.
- 3) 樋口隆志, 新谷大輔, 三根立己, 他: 屋根瓦式教育が理学療法士学生における基礎科目の学業成績に及ぼす影響 日本リハビリテーション教育学会誌. 2024; 7(2): 98-106.
- 4) 澤田有希, 石井孝弘, 長谷川辰男, 他: 作業療法士国家試験における専門分野の動画学習効果に関する研究 帝京科学大学紀要. 2024; 20: 117-127.
- 5) 愛知医療学院大学ホームページ: 資格,
<https://amcr.ac.jp/entrance/point/point1/>, 2025/12/1
- 6) 原田裕輔: 内容分析手法を用いた理学療法士国家試験問題の傾向の可視化と分析の試み 日本リハビリテーション教育学会誌. 2023; 6(3): 103-115.

[短報]

短時間研究プレゼンテーションを用いた教員向け研修会が 研究モチベーションに与える影響

齊藤 誠¹⁾ 山森 孝彦²⁾ 加藤 真夕美³⁾ 藤本 大介¹⁾ 松浦 智美⁴⁾
齊藤 寛子⁵⁾

- 1)愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 理学療法学専攻
- 2)愛知医療学院大学 リハビリテーション学部 理学療法学専攻
- 3)愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻
- 4)愛知医療学院大学 事務局 教育研究推進課
- 5)愛知医療学院大学 事務局 IR・情報課

Effect of a Faculty Development Workshop Using Short Research Presentations on Research Motivation

Saito Makoto Yamamori Takahiko Kato Mayumi Fujimoto Daisuke
Matsuura Tomomi Saito Hiroko

【要旨】

本研究は、教員同士の研究理解を促進し研究活動への意識づけを目的とした短時間プレゼンテーション形式の研修会が、大学教員の研究モチベーションに与える影響を検討した。対象は、本学に所属し2025年5月および7月の研究モチベーションに関するアンケートに全て回答した18名とした。研究モチベーションの評価には18項目からなるResearch Motivation Scale for University Academics (RMSUA)を用い、先行調査に基づき4因子の得点を算出した。研修会は各教員が自身の研究を約90秒で共有する形式で実施した。5月と7月の因子得点をWilcoxon符号付順位和検定で比較した結果、いずれの因子においても有意な変化は認められなかった。一方で、本研修会は教員間の研究共有や研究活動の振り返りを促す機会となり、非定量的な効果が期待される。今後は継続的支援の検討と長期的な変化の評価が必要である。

キーワード：Faculty Development 研究モチベーション RMSUA (Research Motivation Scale for University Academics) 大学教員向け研修

【背景と目的】

大学教員には、研究成果を学術誌や学会に発表することで、学問領域および社会へ貢献することが期待されている¹⁾。また大学評価において研究力が重視されるようになり、大学教員として研究業績を求められる度合いが増すことで研究活動がキャリア形成の中心的要素として強調される傾向が強まっている^{2,3)}。こうした外的期待や業績要求は、教員に対して一定の心理的負荷やプレッシャーを生じさせ、外発的動機づけを高める一方で、研究への自律的で持続的な関与を支える内発的動機づけが低下する

可能性が考えられる。研究を継続的かつ健全に推進していくためには、内発的動機づけを強化し、研究活動を主体的に捉えられる環境を整備することが不可欠である。

大学における研究活動促進の取り組みとして、Staff Development (SD) を通じて教員間の研究理解を深め、内発的動機づけの喚起や研究参画意識の醸成を図る方法が考えられる。愛知医療学院大学・愛知医療学院短期大学（以下、本学）の Faculty Development and Staff Development (FD&SD) 委員会でも、2025年より研究活動促進・研究成果向上を目的とした研究活動促進の取り組みを強化している。具体的には「研究モチベーションの可視化と向上」を目的とした継続的なアンケート調査と研修会の企画・運営を開始した。2025年5月のアンケート調査では、研究活動に対する動機づけを把握するため、研究モチベーション尺度である Research Motivation Scale for University Academics（以下、RMSUA）を用いた分析を行い、教員の研究動機づけが複数の因子から構成されることを確認した。

本論文では、2025年6月と7月に研修会として実施した「教員同士の研究理解と研究活動への意識づけを目的とした短時間プレゼンテーション」が教員の研究モチベーションに与えた影響を明らかにし、研究活動促進に向けたFD&SD委員会の取り組みを紹介するとともに、今後の研修会内容の改善に資する基礎資料を提示することを目的とする。

【対象と方法】

(1)対象

対象は、研究協力の同意が得られた本学に所属する教員とした。2025年5月と7月の研究モチベーションに関するアンケートに全項目回答した者を分析対象とした。

(2)調査内容および分析方法

研究モチベーションの評価には、先行研究⁴⁾を参考に作成した研究者の業務に特化した18項目の質問紙RMSUAを使用した。各項目は6件法（1：全く当てはまらない～6：非常に当てはまる）で回答を得た。本研究に先立って、5月に行ったアンケートのデータに基づき探索的因子分析を行った結果、以下の4因子に分類された（因子分析の因子負荷量・信頼性係数等の詳細は、別途投稿中の論文にて報告予定）。なお、各因子についてCronbachの α 係数を用いた内的一貫性の信頼性が検討されており、いずれも高い値（ $\alpha=0.86-0.94$ ）を示している。

第1因子：Confidence and Intrinsic Motivation（自信・内的動機づけ）

第2因子：External Pressures and Constraints（外的プレッシャー・制約）

第3因子：Extrinsic Motivation（外発的動機づけ）

第4因子：Introjected Regulation（内在化された義務感）

因子ごとの質問内容については表1に示す通りである。各因子の因子スコアの平均値について、7月（介入後）-5月（ベースライン）の変化をWilcoxon符号付順位和検定によって比較した（表2）。

表 1：RMSUA における因子別の下位項目

因子	番号	内容
第 1 因子： Confidence and Intrinsic Motivation (自信・内的動機 づけ)	Q1	研究に取り組むこと自体を楽しんでいる
	Q2	研究計画を立て、予定通り進める自信がある
	Q7	新しい研究アイデアを生み出すことが得意だと思う
	Q14	競争的資金への申請書を説得力のある形で作成できる自信がある
	Q16	研究を行うことで自己成長を感じる
第 2 因子： External Pressures and Constraints (外的プレッ シャー・制約)	Q4	研究への意欲はあるが、精神的・身体的に負担を感じる
	Q8	人事評価や昇進、契約更新のために研究を行っている
	Q10	研究の価値や意味を見失い、意欲が低下することがある
	Q13	共同研究の方が質の高い成果を生むと感じる
	Q17	授業準備や事務業務のために研究時間を確保できないと感じる
第 3 因子： Extrinsic Motivation (外発的動機づ け)	Q3	大学教員としての役割・専門性を果たすために研究は重要である
	Q5	他者の研究成果を見ると、自分も研究に取り組みたくなる
	Q9	学会での研究者との議論が新しい発見やアイデアにつながると考える
	Q11	自分の研究成果を見ると達成感を得られる
	Q15	外部機関や学会から研究成果を求められるため研究を行う
	Q18	研究は自分のキャリア・学術的目標の達成に寄与すると考える
第 4 因子： Introjected Regulation (内在化された 義務感)	Q6	研究を行わないと罪悪感を感じる
	Q12	研究に取り組まないと、教員として恥ずかしさを感じる

(3) 研修会内容

FD&SD 研修会として教員同士の研究理解促進と研究活動への意識づけを目的とした短時間プレゼンテーション企画を実施した。本研修では、各教員に対して自身の研究テーマ、研究の進捗、今後の計画などを約 90 秒、パワーポイントスライド 1 枚で他教員に共有するよう依頼し、2025 年 6 月と 7 月に分かれて、それぞれ 13 名ずつの発表を行った。発表後には簡単なアンケートを行い、特に興味がある場合には発表した教員にコンタクトが取れるようにするなど、教員同士が互いの研究を知り、研究活動を身近に感じられるような交流的な場となるように構成した。発表スライドの作成例は図 1 の通りである。

90秒のプレゼンテーションのための理解しやすく見やすいスライドを作成する研究 PT 清須 太郎

1. PowerPointで縦横16:9のスライドにしてください。
2. 背景は「白の無地に濃い色の文字色」ですと、C201の不鮮明スクリーンでも見やすいです。
3. タイトル・所属・氏名を、最上部の2行を割いて、大きめのゴシック系フォントで書いてください。
4. 本文はフォントサイズ20以上の大きさのゴシック系の字体で、使用言語は日本語か英語で記載してください。
5. 本文は、テキスト、図・表・写真・文字色など、形式は自由ですが「見やすい」スライドを心がけてください。
6. 領域専門外の研究者や一般の方でも理解できて研究の魅力が伝わるような表現の仕方を工夫してください。
7. 最終行にキーワードを1行で書いてください。
8. ファイル名は発表日8桁所属氏名20250624_PT清須太郎



キーワード： 言語伝達力 視覚的明瞭性 プレゼンテーション 概要執筆スキル

図1：教員同士の研究理解促進と研究活動への意識づけを目的とした短時間プレゼンテーション企画の発表スライド作成例

【結果】

本学に所属する全教員(29名)のうち、2回のアンケート調査に過不足なく回答した者は18名であった(有効回答率:62%). 各因子の平均値は、第1因子:5月 18.28 → 7月 17.83, 第2因子:5月 18.39 → 7月 17.50, 第3因子:5月 26.28 → 7月 26.89, 第4因子:5月 8.78 → 7月 8.33である(表2). Wilcoxon符号付順位和検定を行った結果、すべての因子において有意差は認められなかった($p < 0.05$).

表2：各因子の平均値±標準偏差と変化量

因子	5月	7月	変化量	p値
第1因子	18.28±4.20	17.83±3.94	-0.45	0.398
第2因子	18.39±4.10	17.5±4.64	-0.89	0.565
第3因子	26.28±3.97	26.89±4.17	0.61	0.298
第4因子	8.78±2.44	8.33±2.63	-0.45	0.334

【考察】

本研究では、教員同士の研究理解促進と研究活動への意識づけを目的とした短時間プレゼンテーション企画を用いたFD&SD研修会が教員の研究モチベーションに与える影響を検討したが、いずれの因子においても有意な変化は認められなかった。一般的に内的動機づけは短期間の介入で大きく向上させることが難しいことが指摘されており、本研究の結果はその点からも妥当なものと考えられる。

一方で、大学における研究活動は社会的にも重要な役割を担っており、研究活動の促進は大学組織として継続的に取り組む必要のある課題である。今回のような FD&SD 研修会は、教員が互いの研究を知り、研究活動を身近に感じる機会となる点で意義があるといえる。また、RMSUA のような客観的指標を用いて研修効果を定量的に把握することは、FD&SD 委員会が今後の研究支援策を検討する上で有用な基礎資料となる。

さらに、今回の研修会には数値では表れにくい非定量的な効果も期待できる。例えば、プレゼン資料を作成する過程で自身の研究を振り返る機会となることや、他教員の研究内容を知ることによって新たな発想や気づきを得たりする可能性がある。また、研究内容の共有を通して共同研究の契機が生まれるなど、長期的な影響が生じることも考えられる。これらの効果は短期的な定量指標では捉えにくいため、今後も継続的な支援と効果検証を行いながら、より適切な評価指標を検討していく必要がある。

【文献】

- 1) Peng J-E, Gao X: Understanding TEFL academics' research motivation and its relations with research productivity. SAGE Open. 2019; 9(3): 1-13.
- 2) Kotera Y, Asano K, Barnes K, et al.: Development of the Japanese version of the original and short Work Extrinsic and Intrinsic Motivation Scale. Jpn Psychol Res. 2024.
- 3) Hazelkorn E: Rankings and the reshaping of higher education: The battle for world-class excellence. Palgrave Macmillan, London, 2015
- 4) Fernet C, Senécal C, Guay F, et al.: The Work Tasks Motivation Scale for Teachers (WTMST). J Career Assess. 2008; 16(2): 256-279.

介護予防事業における革細工プログラムは高齢者に どのような「楽しさ」や「辛さ」を引き起こすか

加藤 真夕美 外倉 由之 清水 一輝

愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

What kinds of "enjoyment" and "difficulties" does the leather craft program in preventive care services bring to the elderly?

Kato Mayumi Tokura Yoshiyuki Shimizu Kazuki

【要旨】

介護予防普及啓発事業としての高齢者大学（清須市民げんき大学）において、作業療法士が主導し集団で行う革細工が、参加する高齢者にどのような種類の「楽しさ」あるいは「辛さ」を引き起こすのか、作業直後のアンケートやレポートを質的に分析することにより明らかにすることを目的として調査を行った。高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法およびプログラム後レポートの感想を質的に分析した。結果、楽しさについては「人と関わることの楽しさ」「達成感による楽しさ」の順に平均得点率が高く、人との交流や達成感を求めている対象者の姿が明らかとなった。一方で単発かつ短時間のプログラムであるが故の思い通りにいかないもどかしさや、個人の体調の側面が辛さとして主に表出された。また新奇作業への不安は作業を通して肯定的な経験に昇華され得ることも確認できた。

キーワード：介護予防 作業療法 革細工 楽しさ 高齢者大学

【はじめに】

理学療法士及び作業療法士法（昭和40年法律第百三十七号）の第二条では、作業療法は「身体又は精神に障害のある者に対し、主としてその応用的動作能力又は社会的適応能力の回復を図るため、手芸、工作その他の作業を行なわせることをいう」と定義付けられている。作業療法士は、対象者が基本的動作能力・応用的動作能力・社会的適応能力という3つの能力を獲得、あるいは再獲得し、「その人らしい」生活を獲得していく過程を、作業を用いて支援する。作業に焦点を当てた実践では、目標とした作業を達成するための一手段として、他の作業を用いることがある。この手段としての作業のことを、作業療法士は治療課程の中で Activity と呼ぶことが多い。

愛知医療学院大学（以下、本学）では清須市との官学連携事業として高齢者大学である「清須市民げんき大学（以下、げんき大学）」を実施している。げんき大学は、清須市の一般介護予防事業（介護予防普及啓発事業）として平成29年度より開講し、令和7年度で第9期生を迎えた。

本学作業療法学専攻（以下、OT）教員は、げんき大学の企画・運営から各プログラムの実施に至るまで、様々に関わっている¹⁾。その中の1つの取り組みが、げんき大学生に対

する革細工プログラムである。「心身機能を高めるものづくり～革細工を楽しもう～」と題し、馴染みのない Activity の実践を通して Activity の有効性を理解することを目的に革細工を行っており、今年度で9度目の開催となった。毎年本プログラム後の振り返りレポートでは「楽しかった」との感想が多く、60分という限られた時間ではあるが、げんき大学参加者にとって充実したものになっていると実感している。

本家²⁾は、高齢者における余暇活動の楽しさの研究や実践を通して「過去の楽しさは、肯定的な想いで現在や未来を繋げることを可能にし、高齢者が能動的に生きていくための最強の概念になる」と考えていると述べている。また、松川³⁾は、地域の高齢者の余暇活動への参加状況などを調査する中で、多くの高齢者が2つ以上の余暇活動を行い、「この趣味を楽しむために体操などの運動を取り入れ体力・筋力を維持」しており、健康を維持するためには「楽しいという感情が加わって」おり、「何よりも仲間の存在が大きくある」と結論付けた。

本学で取り組んでいる革細工において加藤ら⁴⁾は、模様や色の選定において多くの高齢者が「未来の自分に向けて今の自分を表現し記録しようとしたり、目の前の素材や道具を最大限に生かすイメージを具現化しようとしたり、社会と繋がろうとしている」ことを明らかにした。高齢者らのこれらの試みが、楽しいという感情が現れた結果であるとするならば、集団で革細工を行うという行為 (Activity) が、高齢者らにどのような種類の楽しさを引き寄せるのであろうかという疑問が、本研究の端緒である。革細工の持つ「楽しさ」、あるいはその反対の側面である「辛さ」の種類を明らかにすることにより、げんき大学で行っている革細工の、介護予防としての位置づけを明確にするとともに、作業療法士が治療手段として Activity を用いる際の作業選択の一助になると考えられる。

【目的】

げんき大学において集団で行う革細工が、参加する高齢者にどのような種類の「楽しさ」あるいは「辛さ」を引き起こすのか、作業直後のアンケートやレポートを質的に分析することにより明らかにすることを目的とする。

【対象】

令和7年度にげんき大学の講座で革細工を体験した26名のうち、プログラム後のアンケートおよび振り返りレポートを提出し、かつ本研究に同意した26名 (回収率100%) を対象とした。26名の革細工を実施した当日時点の年齢内訳は、60歳台10名、70歳台16名 (平均70.8±4.1歳) であり、性別内訳は女性22名、男性4名であった。

なお本研究は、本学の研究倫理委員会の承認を得て実施した (承認番号24011)。

【方法】

1. げんき大学における革細工プログラムの進め方

げんき大学生は、既に裁断と床面処理の済んだ牛革を用いて、60分間で図柄の計画、打刻印、染色の3工程を体験した。1テーブルに4～5名が向き合う形で座り、雑談しながら作業を進めた。OT 教員は流れや注意点を解説し、全体を見回りフォローアップする役割を担った。また本学 OT 学生を各テーブルに1名ずつ割当て、げんき大学生のサポートを

してもらった。

プログラム中に打刻印と染色が終了した作品は、OT 教員が後日レザーコートの塗布とバネホックの取り付けを行い、三角財布として成型する。三角財布は、革細工プログラムの日から約1ヶ月後にOT教員がラッピングしてクリスマスプレゼントとしてげんき大学生に手渡すのが通例である。

2. 楽しさの評価と感想の収集

革細工プログラムが開始から55分経過した時点で、作業の区切りの合図をした。その後、研究説明およびアンケート依頼をし、以下①②の2種類の用紙を全参加者に手渡した。締め切りは2週間後のげんき大学受付時とした。これらのアンケートは、革細工プログラムの振り返り課題としているものであるため提出自体は必須としたが、アンケートを研究利用することに承諾する意思を表明するためのチェック項目を末尾に設けた。

①高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法 (The Japanese elderly version of Leisure Activity Enjoyment Scale ; 以下 LAES)

LAES は、高齢者は過去に経験した余暇活動について、その活動の楽しさを18の視点から自己評価するものである。4(とてもそう思う)、3(ややそう思う)、2(ややそう思わない)、1(とてもそう思わない)の4件法で評価する。人間作業モデル(MOHO)を基盤とし、通常は対象者個々へのインタビュー形式で余暇活動の楽しさを自由に語りながら評価してもらうものであるが、今回は1枚ずつ評価用紙を配布し、1~4の評点のみをつけてもらう方法とした。

結果は18の設問番号ごとに平均値を算出した。また「過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ」「人と関わる楽しさ」「考える楽しさ」「達成感による楽しさ」「心や体が肯定的に変化する楽しさ」の5つの楽しさの構成概念ごとに平均値を算出した。

②振り返りレポート

授業の総括となるレポートで、模様や色の選択動機、また作品に込めた思いなどを問うものであるが、今回は末尾の感想の部分のみを研究として利用した。A4用紙縦置きで「本日の感想をお聞かせください」という教示文を記し、高さ7cmの自由記載枠を設けた。

一人のレポートに複数の文章が記載されている場合には、一文ずつに分けて処理した。また一文が長文で、複数の要素が含まれている場合には、前後の脈絡を損なわない部分で区切り、それぞれを一文として処理した。

【結果】

1. LAES の各設問における評点ごとの人数と平均値

LAES の各設問における評点ごとの人数と平均値は表1の通りである。平均値の最低値は「4: 準備をすることから楽しい」の3.2点であり、最高値は「6: 仲間と行えるから楽しい」の3.8点であった。

「5: 体を使うことが楽しい」と「7: 人と話をしながら行るのが楽しい」の2項目では、2(ややそう思わない)、1(とてもそう思わない)の低評点が一人もいなかった。

一方で、2点と1点の合計人数が、「4:準備をすることから楽しい」6名、「3:思うとやってみたくなる」5名、「18:心が落ち着くから楽しい」4名の順で多かった。18項目の設問中2あるいは1の評点を付けた対象者は9名で、1項目のみが3名、2項目2名、4項目1名、8項目1名、1項目2名であった。11項目の2名は、他の設問はすべて3点であった。

表1 LAESの各設問における評点ごとの人数と平均値

番号	設問	評点ごとの人数 (人)				平均 (点)
		4	3	2	1	
1	思い出だけでも楽しい	19	6	1	0	3.7
2	好きである	16	8	1	1	3.5
3	思うとやってみたくなる	18	3	4	1	3.5
4	準備をすることから楽しい	11	9	5	1	3.2
9	すること自体が楽しい	21	3	2	0	3.7
6	仲間と行えるから楽しい	21	4	1	0	3.8
7	人と話をしながら行うのが楽しい	19	7	0	0	3.7
15	新たな仲間ができるから楽しい	20	5	1	0	3.7
8	様々なことを考えながら行くと楽しい	15	8	2	1	3.4
14	様々なことに気づけるから楽しい	18	5	2	1	3.5
17	よいアイデアが浮かぶなど創造性が広がるから楽しい	14	9	3	0	3.4
5	体を使うことが楽しい	18	8	0	0	3.7
10	人に褒められる・喜ばれるなど人に認めてもらえると楽しい	22	3	1	0	3.8
11	成果を予測できるから楽しい	14	11	1	0	3.5
13	努力するとよい結果がでるから楽しい	17	6	3	0	3.5
12	心や体が気持ちよくなるから楽しい	19	5	2	0	3.7
16	自分を成長させてくれるので楽しい	17	6	3	0	3.5
18	心が落ち着くから楽しい	14	8	3	1	3.3

4:とてもそう思う 3:ややそう思う 2:ややそう思わない 1:とてもそう思わない
2点と1点の合計が4名を超えるものにグレー網掛けを施している。

2. LAES の構成概念ごとの平均値と満点に対する割合

LAES の構成概念ごとの平均値と満点に対する割合は、表 2 の通りであった。各概念で満点が異なるため、満点に対する割合を算出した。各割合は、「過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ(表 1 の設問番号 1,2,3,4,9)」87.7%、「人と関わる楽しさ(同 6,7,15)」93.6%、「考える楽しさ(同 8,14,17)」86.5%、「達成感による楽しさ(同 5,10,11,13)」90.9%、「心や体が肯定的に変化する楽しさ(同 12,16,18)」87.8%であった。

表 2 LAES の構成概念ごとの平均値と満点に対する割合

楽しさの構成概念	設問番号	満点 (点)	平均 (点)	割合 (%)
過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ	1,2,3,4,9	20	17.5	87.7
人と関わる楽しさ	6,7,15	12	11.2	93.6
考える楽しさ	8,14,17	12	10.4	86.5
達成感による楽しさ	5,10,11,13	16	14.5	90.9
心や体が肯定的に変化する楽しさ	12,16,18	12	10.5	87.8

3. 感想から見る革細工プログラムの楽しさ

全 67 件の感想が挙げられた。内容によって LAES の構成概念に振り分けたものを表 3 に記す。なお、迂遠や重複表現は簡略化して表記している。加えてレポートでは敬体だったものを表 3 では常体に変換している。楽しさの中にも開始時の不安や戸惑いがあったとの記載も複数件あり、表 3 では、太字かつアンダーラインで示している。加えてカッコ内の数字は、同一感想の件数を表している。

また、楽しかったことのみを表出や感謝の言葉、反省や要望、説明の仕方への評価など、LAES への振り分けに馴染まないものは除外した。

除外したものは以下の通りである。

- ・とても楽しかった (2 件) / 楽しかった (2 件)
- ・ありがとう (2 件) / お世話してくれた皆さんありがとう
- ・もう少しじっくりと落ち着いてやりたかった。皆が早いから焦り自分の思うようにできなかった / 試しをせずいきなり塗って少し失敗した / 腕の力が弱いので、腕の付け根がだるくなった / はじめての作品でイメージからはかけはなれた作品のような気がする / 短時間の仕上げだったので何だかワチャワチャ
- ・できればもう少し時間をかけて丁寧に作りたかった / 塗料を塗るとき形を残せるようにとアドバイスがもらえたらよかった
- ・夢中になると (教員の声が) 耳に入らない、自分のことで精一杯だった。教員の指導がよく心得ていると感心した / 初めての経験でどんなことをするのか心配していたが、きちんと説明してもらいやり方も納得して行った
- ・革アレルギーの人がいなくて良かった

表3 LAESの構成概念に振り分けた参加者の感想

楽しさの構成 概念	感想
過去・現在・ 未来に想いを 広げる楽しさ	<p>要領が掴めたので今度は上手にできそう、出来上がりが楽しみ、出来上がるのがものすごく楽しみになる、できあがりを手にするのが楽しみ、初めての経験だったが学祭で見ていたので楽しく作成できた、何かを作ることの喜びを再確認した、過去に習いに行ったことを思い出した、久しぶりにレーザークラフトができてとても楽しかった、手軽な手芸でもしたくなった、作品を作る楽しさを思い出させてくれそれに感化されてまた手芸を始めてみた、これからも機会を作って行いたい作品を受け取るのが楽しみ、できたものをいただくのが楽しみ、出来上がりがとても楽しみ、出来具合はよくなくても作った作品は大事に使う、初めてで興味深く面白かった、ほとんど初作業で興味深く楽しくできた、もう一度やりやい、もっとレーザークラフトに時間を使ってもらいたい、時間があつという間でもっと色々やってみたいと思った、1時間があつという間に過ぎた、初めての体験はどんな時もドキドキする、個人的に苦手はこの時間は休もうかと思うほどだったがやってみたいなという気持ちもありこの時間をもてたことは良い経験だった、何を作るんだろうと不安と楽しみで参加した</p>
人と関わる楽 しさ	<p>普段話したこともない人とおしゃべりできて大変良かった、周りの人と話しながら楽しい時間ではあった、同席の人といろいろ話しながらするのも楽しかった、仲間と話しながら人の作品と比べながら自分の作品の出来を見て満足することで幸せな気持ちになった、物作りは会話も生まれる、学生も笑顔でサポートしてくれスムーズにできた、学生の優しさや笑顔が癒しになった、皆思った以上の創作意欲があり、前向きな雰囲気が出ていたように思う</p>
考える楽しさ	(該当なし)
達成感による 楽しさ	<p>短い時間だったがとても楽しい有意義な授業だった、とても充実した時間だった、すごく良い経験ができた(2)、短時間で1つの作品が出来上がり良かった、自分の作品が出来上がることは喜びに変わる、自分で作った作品ができて嬉しい、自分で手を加え実用的なものが出来上がる、作業を通して何か創り上げることは充実感が得られると改めて思った、初めてするのでやれるのか心配だったが、案外ちゃんとできて嬉しかった</p>
心や体が肯定 的に変化する 楽しさ	<p>久しぶりに楽しく集中できた、手を動かし何かを作る作業がとても楽しく感じた、物作りは手先を使う、単調な動きは機能を回復する、脳の中は集中できると思う、ものづくりはわずかでも心身機能を高めることができたと思う、自分で考えて物を作ることはボケ防止や生きがいに繋がりととても良い学びになった、最初は戸惑ったが出来上がる頃には心が明るくなり血流が良くなり体もぽかぽかしてきた</p>

不安や戸惑いの表現は、太字かつアンダーラインで示している。カッコ内の数字は件数を表している。

【考察】

1. 革細工プログラムの「楽しさ」の要因

LAESにおける5つの楽しさの構成概念の中で最も評点平均が高かったのは「人と関わる楽しさ」の93.6%であり、次いで「達成感による楽しさ」の90.9%であった。更に人と関わる楽しさに含まれる「7：人と話をしながら行うのが楽しい」や、達成感による楽しさに含まれる「5：体を使うことが楽しい」では、26名の対象者すべてが4または3点と評価した。

「人と関わる楽しさ」に関して、表3では「普段話したこともない人」「周りの人」「仲間」「学生」が交流相手として挙げられた。革細工は、個人の作業として考えると巧緻性や筋力増強⁵⁾など種々の身体的効用を期待できるActivityであるが、集団で行うと「人と関わることの楽しさ」が、「心や体が肯定的に変化する楽しさ」をしのぐことが示された。本革細工プログラムでは、げんき大学生同士のみならず、OT学生やOT教員との交流も自然な流れの中で生じるように設計している。作業の場自体が作業療法の一部であり、Activityを集団で行うことの有用性を再認識することができた。

一方で「達成感による楽しさ」について、表3から「有意義な時間」「充実した時間」「自分の作品が出来上がる」「自分で作った作品ができて嬉しい」「自分で手を加え実用的なものが出来上がる…(中略)…充実感」というキーワードを抽出することができる。谷合⁶⁾が「なじみのある革を素材にして、実用的な作品を作るとすれば、興味・関心は引き出されやすい」と述べているように、作業の新奇性そのもののよりも、短時間で実用的なもの、形に残るものを自分自身の手で作り上げたという喜びや充実感が、達成感に繋がったと考えられる。

本革細工プログラムはOT教員が主導し、「作業の場」の設定や作業の難易度調整、工程の簡略化、成功体験を得やすい説明や構成など微調整を繰り返しながら毎年バージョンアップしている。Activityを単なる趣味活動として提供するのではなく、作業療法士が介入手段という位置づけで意図をもって提供することで、高齢者にとって馴染みの薄い作業であっても、適切な支援により肯定的な経験に昇華され「過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ」に繋がり得ると考えられる。

2. 革細工プログラムの「辛さ」の要因

LAESの結果は、18項目で満遍なく4または3点と評価した対象者が多かった一方、半数以上の項目で2または1点をつけた対象者が3名であった。

作業療法士は臨床現場で治療対象となる患者にActivityを治療手段として提供することがある。浅沼⁷⁾は、作業処方について「対象者の機能回復のために作業療法を行うとき、その理由、作用機序、効果、根拠を示した上で、ふさわしい作業を選択し適用すること」と定義している。数名の好みに合わないかもしれないActivityが組み込まれてしまうのは、対象者を募集する前に確定されたプログラムを予定通り実施する介護予防事業の限界であると言える。出田⁸⁾の述べるように、「いろいろな層の参加者が納得できるような丁寧な説明、押しつけと捉えられない態度など柔軟性をもって展開していく」必要がある。

感想からも、「もっと時間をかけて行いたかった」「もう少しアドバイスが欲しかった」という意見が複数あり、革細工プログラム実施前の入念な説明や準備が必要であると考えられる。また腕力に不安を覚える参加者もあり、今回は本学のOT学生がサポートすることで作品を仕上げたが、対象者の心身状況を十分に把握し対象者の意思を聞き取っておくなど、やはり当日に向かう事前の準備が更に必要なことが反省点として挙げられた。

一方で「初めての経験でどんなことをするのか心配していた」「初めてするのでやれる

のか心配だった」などという不安が5件挙げられていたがいずれも「納得して行った」「案外ちゃんとできて嬉しかった」など、対象者各自がこの経験を良いものとして自分の中に落とし込もうとしたことが読み取れる。出田⁸⁾が「参加者に多様な経験を提供することは、社会参加の次のステップへ踏み出すエネルギーを生み出して、大きく成長させることができる」と述べているように、本革細工プログラムも、対象者の未来への可能性を広げる役割の一部を果たしていると考えられる。

【おわりに】

本研究では、介護予防事業における集団作業としての革細工の導入により、対人交流や達成感に起因する楽しさが「もっとやりたい」「また何か作りたい」という自己実現の欲求を喚起した一方で、作業の複雑性や時間的制約、参加者の体調面への配慮という限界を併せ持つことが示された。今後はより効果的な介護予防プログラムとなるよう、作業の場の設定や作業の難易度調整等、作業療法士としての専門性をいかに活かせるかという視点を踏まえつつ実践を通して検証を重ねていきたい。

【謝辞】

アンケートおよび振り返りレポートを丁寧に記入し、かつ研究利用することに同意いただいた清須市民げんき大学生の皆様、並びに革細工プログラムを充実したものになるようサポートして下さった6名の本学OT学生諸氏に、心より感謝申し上げます。

【文献】

- 1) 加藤真夕美, 清水一輝, 外倉由之ほか: 作業療法教員が地域の介護予防事業に関わることの意義. 愛知医療学院短期大学紀要. 2024; 15: 16-24.
- 2) 本家寿洋: 高齢者への楽しさの実践—楽しさは高齢者が生きていくうえでの最強の概念である—. 作業行動研. 2020; 24(1), 1-5.
- 3) 松川典代: 余暇活動と健康寿命の関連性—高齢者における余暇活動は生きがいを生み健康寿命を延ばす事は出来るのか—. 敬心・研究ジャーナル. 2020; 4(1), 125-128
- 4) 加藤真夕美, 外倉由之, 清水一輝: 高齢者は馴染みのない作業に取り組むとき模様や色をどのように選択しどのような思いを込めるのか. 愛知医療学院大学紀要第1号. 2025, 21-28.
- 5) 谷合義旦: 革細工, つくる・あそぶを治療にいかす作業活動実習マニュアル第2版. 古川宏(監), 医歯薬出版, 東京, 2018, p50.
- 6) 谷合義旦: 革細工, 作業—その治療的応用改訂第2版. 日本作業療法士協会(編), 協同医書, 東京, 2003, p16.
- 7) 浅沼辰志: はじめに, 作業処方—症例の分析と思考プロセス—. 武田淳史(監), メジカルビュー社, 東京, 2013, p4.
- 8) 出田めぐみ: 介護予防事業におけるレクリエーションの役割, レクリエーション第3版活動と参加を促すレクリエーション, 山寺久美子, 中村春基(監), 三輪書店, 東京, 2021, p218.

[活動報告等]

リハビリテーション専門職養成課程における数理・データサイエンス・
AI教育 (MDASH) の質保証と学修支援
—生成AIを用いたリフレクションペーパーの分析と
学習者の理解度に応じた復習計画の提案—

田中 雅章¹⁾ 山田 和政²⁾

1)愛知医療学院大学 リハビリテーション学部 作業療法学専攻

2)愛知医療学院大学 リハビリテーション学部 理学療法学専攻

**Ensuring Quality and Supporting Learning in Mathematics, Data Science,
and AI Smart Higher Education (MDASH) within Rehabilitation Training
Programs: Generative AI-Based Semantic Analysis of Reflection Papers and
Adaptive Review Planning**

Tanaka Masaaki Yamada Kazumasa

【要旨】

本活動は、リハビリテーション専門職養成課程における数理・データサイエンス・AI教育 (MDASH) の実効性を高めることを目的として、Google Formsと生成AIを融合させた授業改善支援システムを構築し、その有用性を論じたものである。医療系学生が情報科学や統計学に対して抱きやすい心理的障壁に着目し、学習管理システム (LMS) を通じて収集したリフレクションペーパーを生成AIにより授業直後に解析する仕組みを導入した。大規模言語モデル (LLM) を用いた文脈理解に基づく意味分析および要約により、学生の理解度や潜在的なつまづきを可視化し、次回の復習計画へ即座に反映させるフィードバック・ループを確立した。実践の結果、教員の業務負担が軽減するとともに、形成的評価の充実と学生の学習参加を促した。本取り組みは、データに基づき改善を繰り返す臨床推論のプロセスと通底しており、根拠に基づく実践 (EBP) を体験可能な枠組みにも寄与する試みである。

キーワード : Reflection paper ICT活用 Google Forms 形成的評価

【はじめに】

愛知医療学院大学 (以下、本学) において、2020年度より学習管理システム (LMS: Learning Management System) の基盤としてGoogle Workspace for Educationを導入し、全学的な情報通信技術 (ICT: Information and Communication Technology) 教育環境の整備を推進してきた。同システムは、クラウドコンピューティングを活用した教育研究支援環境であり、その中核としてGoogle Classroom (以下、Classroom) が授業実践で深く浸透している。Classroomは、課題の配布、課題の提出、自動採点、フィードバックといった一連の学習過程を統合的に支援するだけでなく、Googleドキュメントやスライド、

Google Forms等のアプリケーション群とシームレスに連携することで、多様な学習成果物の蓄積を可能にした。また、提出期限の管理や、採点基準（ループリック）の設定なども柔軟に行える仕様となっている。これまでの導入成果として、教務の効率化による教員のワークロード軽減が挙げられるが、本活動においてより重要な点は、Classroomが学生の学習プロセスをデータとして可視化し、教育改善のPDCAサイクルを回すためのプラットフォームとして機能している点にある。

こうした全学的なICTを活用した教育基盤の整備が進む一方で、医療・福祉領域においてデジタルトランスフォーメーションへの対応が急務となっている。とりわけリハビリテーション（以下、リハ）分野においては、根拠に基づく実践（EBP: Evidence-Based Practice）の定着に伴い、臨床データの蓄積・解析および人工知能（AI: Artificial Intelligence）の応用が不可欠となっている。こうした社会的要請を背景に文部科学省は、数理・データサイエンス・AI教育の推進を目的に、数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度を実施している。本制度では英語表記として *Mathematics, Data Science and AI Smart Higher Education* (MDASH) が用いられており、本稿では以下、一般的な通称である「MDASH認定制度」と表記する。

これを受け、リハ専門職養成課程でも、従来の医学的知識に加え、データを科学的に取り扱う「数理・データサイエンス・AI」に関するリテラシーの育成が求められており、本学においても文部科学省が推奨するMDASH認定制度の認定を取得するに至った。

しかし、医療系を専攻する学生にとって情報科学や統計学は必要不可欠な領域である一方で、専門性との関連を実感しにくい側面がある。とりわけ、情報処理の基礎の一つであるExcelの操作や、数理的思考を要する統計学の習得には、心理的・技術的な障壁が存在するのが現状である。この障壁は単なる知識不足ではなく、数理的データと臨床像が結びつかないことに起因する。そこで、MDASH認定プログラムの質を保証し、実効性のある教育を行うためには、これらの障壁を取り除く新たな教育的介入が必要と考えた。本活動ではClassroomの機能と生成AIを融合し、学生をつまづきを早期に発見するとともに、Excelおよび統計学の理解を促進するための教育支援システムを設計・開発した。本稿では、本学におけるMDASH教育の構築プロセスと、Classroomおよび生成AIを活用した教育支援システムの概要を示すとともに、その教育効果とリハ養成教育における意義について論考する。

【リハビリテーション教育におけるMDASH導入の背景と意義】

1) 保健医療分野におけるデータ駆動型アプローチの進展とEBPの深化

情報通信技術（ICT）の指数関数的な進化は、我々の社会生活のみならず、保健医療・福祉の在り方を根底から変容させつつある。日本政府が提唱する「Society 5.0」は、仮想空間と現実空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会を目指すものである。この潮流の中で、医療分野におけるデジタルトランスフォーメーションは、単なる業務効率化の手段を超え、診断・治療・予防のパラダイムを再定義する原動力となっている。

とりわけ、リハ領域において、こうした技術革新の影響は著しい。従来、療法士の「眼」と「手」による主観的評価に依存していた身体機能や動作分析は、高精度センサーやセン

シング技術の進歩により、かつてない解像度で定量化されつつある。例えば、三次元動作解析装置や床反力計といった実験室レベルの大型機器に加え、慣性計測装置 (IMU) を内蔵したウェアラブルセンサや、深度カメラを用いたマーカーレスモーションキャプチャ技術の普及により、日常生活環境下における連続的な生体データの収集が可能となった。これに加え、介護保険領域における「科学的介護情報システム (LIFE)」の運用開始に象徴されるように、全国規模で標準化されたデータベースの構築が加速している。これにより、臨床現場で蓄積されるデータは、その量・速度・種類において爆発的な増加を見せており、まさにビッグデータとしての様相を呈していると言える。

こうした技術的・社会的変化は、リハ領域における根拠に基づく実践 (EBP) に対し、質的な深化を迫っている。従来のEBPのプロセスは、主に文献データベースからランダム化比較試験やシステマティックレビューといった「外部エビデンス」を検索し、それを療法士の臨床経験および患者の価値観と統合して適用することに主眼が置かれてきた。しかし、データ駆動型社会においては、このプロセスに加え、施設や自身が担当する患者から得られるリアルワールドデータを直接的に解析し、目の前の症例に最適化されたエビデンスを即時的に創出・検証する能力が新たに求められる。すなわち、現代のリハ専門職には、「既存の知見を消費する」段階から、「臨床データに基づき知見を生産・循環させる」段階へのパラダイムシフトへの適応が不可欠となっているのである。

2) リハビリテーション臨床における情報科学・統計学的リテラシーの必要性

前述したデータ駆動型のアプローチを臨床現場で実装するためには、従来のリハ専門職が涵養してきた解剖学・生理学・運動学等の医学的知識体系に加え、情報科学および統計学に基づく高度なリテラシーが「第二の専門性」として要求される。

第一に、情報科学的観点からは、多様なモダリティから得られる情報を適切に取り扱う「データエンジニアリング」の素養が必要となる。臨床データは、関節可動域や筋力値といった構造化された数値データだけでなく、自由記述のカルテ記録、画像データ、時系列の波形データといった非構造化データを多く含む。これらのデータを解析可能な形式へと変換するためのクリーニングや正規化といった前処理を行い、適切なセキュリティ管理下で運用する能力は、現代の医療従事者にとって基本的なスキルセットとなりつつある。さらに、機械学習や深層学習 (Deep Learning) に代表される人工知能技術の実用化も見逃すことはできない。すでに、脳画像に基づく予後予測モデルや、歩行動画からの転倒リスクを推定するAIなどが臨床応用され始めている。ここで重要となるのは、AIを魔法の杖として盲信するのではなく、そのアルゴリズムが導出した結果に対し、学習データに内在するバイアスや過学習の可能性、さらには説明可能性の限界を理解した上で、最終的な臨床的意思決定の補助として批判的に活用する姿勢である。いわゆるAI倫理 (Ethical, Legal and Social Issues) を含む情報リテラシーは、患者の安全を守るための防波堤となる。

第二に、統計学的観点からは、データに内在する「不確実性」や「ばらつき」を科学的に解釈する能力が不可欠である。リハの対象となる人間の身体機能や回復過程は極めて多様であり、個人差が大きいことが常態である。したがって、ある介入手法の効果を検証する際には、単純な平均値の比較による記述統計的把握に留まらず、推測統計学の手法を用いた慎重な判断が求められる。具体的には、 p 値や信頼区間の正しい解釈、効果量による臨床的意義の評価、さらには交絡因子を調整するための多変量解析の概念理解などが挙げら

れる。統計的思考力は、単に学会発表や論文執筆のために必要なスキルではなく、目の前の患者に生じている変化が「偶然の誤差」なのか、それとも「治療介入による真の効果」なのかを見極めるための、臨床推論の中核をなすコンピテンシーであるとも言える。

3) MDASH認定制度活用の教育学的意義と人材育成の展望

現状の多くのリハ専門職養成課程において、数理・データサイエンス教育の実装は容易な事ではない。カリキュラムは国家試験出題基準に基づく専門科目の履修で過密状態であり、新たな科目を追加する余地は限定的である。また、医療系を志望する学生には様々な学習経験をもつ者がおり、その中には数学や論理的思考に対する苦手意識、いわゆる数学不安を抱く学生も少なくない。このような現状に対し、文部科学省が推進するMDASH認定制度の認定を本学が取得し、教育プログラムとして導入することは、単なるトレンドへの追従を超えた、深遠な教育学的意義が存在する。

その第一の意義は、教育の質の「標準化」と「客観的保証」にある。MDASH認定制度に認定されるリテラシーレベルおよび応用基礎レベルは、政府のAI戦略に基づき、産官学の有識者によって策定されたモデルカリキュラムに準拠している。本認定を取得することは、本学のカリキュラムが特定の教員の個人的関心や独断によって構成されたものではなく、社会的に要求される普遍的なスキルセットを網羅し、一定の質的水準をクリアしていることを対外的に証明するものである。これは、教育機関としての説明責任を果たすとともに、内部質保証のシステムを強化する強力なツールになりえる。

第二の意義は、既存の専門教育との「有機的統合」を促進する契機となる点である。MDASH認定制度に認定される教育の真価は、情報系科目を独立した「飛び地」として扱うのではなく、リハ専門科目との文脈的統合を図る点にある。例えば、「情報科学」において実際の身体計測データを扱い、「統計学」で理学・作業療法研究のデータを教材として用いる。さらには「運動学実習」や「評価学実習」の中で、取得したデータのばらつきや誤差について統計学的な視座から考察を行う。このように、数理・データサイエンスを「専門性を高めるためのレンズ」として位置づけるカリキュラム・デザインを行うことで、学生は抽象的な数式の羅列に意味を見出し、学習への動機づけを高めることができる。これにより、「文系・理系」という旧来の二項対立的な枠組みを超越し、データとの親和性を持った医療人を育成することが可能となる。

第三に、多職種連携における「共通言語」の獲得である。地域包括ケアシステムにおいては、医師、看護師、薬剤師、介護福祉士、そしてリハ専門職が、それぞれの専門性を活かしてチームアプローチを行う。この際、患者の状態やケアの方針を共有するための最も強力な共通言語は「データ」である。MDASH認定プログラムを通じて、データを正しく読み、正しく図示し、論理的に説明するスキルを習得することは、チーム医療におけるコミュニケーションコストを下げ、円滑な連携を実現するための基礎体力となる。

リハ養成校におけるMDASH認定の取得と導入は、Society 5.0時代への適応という外圧的な要請に応えるだけのものではない。それは、未来の医療を担う専門職が、豊かな人間性と高度な医学的知見を基盤としつつ、データ科学という新たな武器を自在に操り、より個別化され、かつ科学的根拠に基づいた質の高いリハを提供できる自律的な実践家へと成長するための、不可欠な教育インフラの整備であると位置づけられる。本学におけるこの取り組みは、次世代のリハ教育のモデルケースとして、広く社会に還元されるべきもので

ある。

【生成AIを活用したリフレクションペーパー分析による学習支援】

1) リハビリテーション教育におけるMDASHの障壁と課題

リハ専門職養成課程において、数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定レベルの教育を実装する上での最大の障壁は、学習者の抱く心理的側面である。多くの学生は、対人援助職としての動機づけは高い一方で、抽象度の高い数式や論理的思考、あるいは無機質に感じられるExcel操作に対して、「臨床との関連性が見えにくい」「難解である」という苦手意識を抱きやすい。特に、基礎必修科目として配置されている情報科学(Word, Excel, PowerPoint)や統計学は、その後の専門科目のひとつである理学療法研究法や作業療法研究法、卒業研究の基盤となる重要単元であるにもかかわらず、画一的な講義形式では学生個々のつまずきに対応しきれず、結果としてデータ嫌いを助長してしまうリスクをはらんでいる。

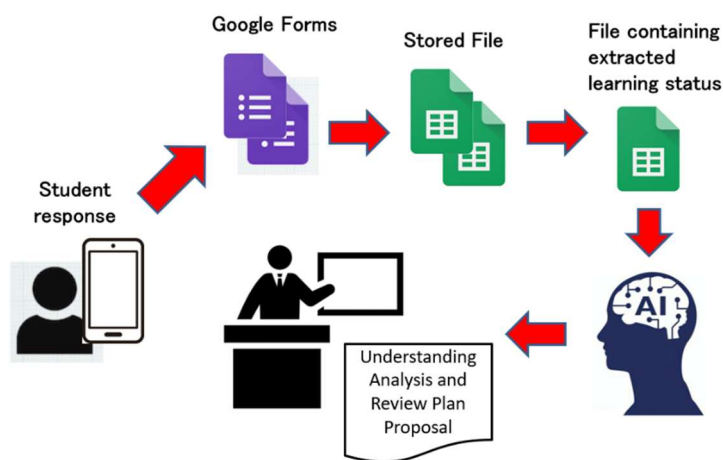
従来の教育実践において、この課題に対する解のひとつは、教員による「リフレクションペーパー (Reflection Paper : 以下, RP)」の精読と個別指導であった。RPは学習者の内省を促し、メタ認知能力を高める強力なツールである。しかし、約100名規模の講義において、手書きあるいは非構造化データとして提出されるRPを教員が毎回詳細に分析し、次の授業までにフィードバックを行うことは、時間的制約から事実上不可能に近いことは明白である。理解状況の現状把握に時間がかかってしまうフィードバックの遅延は、学習者の誤概念の定着を招き、教育効果を著しく減衰させることになる。

学習支援の個別最適化と教員の業務負担軽減を両立させるべく、本活動ではClassroomのGoogle FormsによるRPの提出と、大規模言語モデル (Large Language Models: LLM) に基づく生成AIを結合させた、新たな「授業改善支援システム」を設計・構築した。そのシステムアーキテクチャと運用フロー、および教育的意義についての概要を図1に示し、その詳細を記述する。

2) システムの設計思想とデータ収集プロセス

本システムは、学生の主観的な「理解度」と定性的な「記述内容」を即時的に収集・分析し、その結果を次の授業設計 (Instructional Design) に直接還流させる「データ駆動型フィードバック・ループ」の構築を主眼としている。

データ収集のインターフェースには、本学で導入済みのLMS (Classroom) と連携したGoogle Formsを採用した。毎回の授業終了直後に「リフレクションタイム」として設定し、スマートフォンからのRP提出を義務化した。収集項目は、定量的評価と定性的評価を組み合わせた以下の4項目で構成されている。



1. 理解度点数 (5段階リカート尺度) : 授業の到達目標に対し, 1 (全く理解できなかった) から5 (完全に理解できた) までの主観的自己評価を問う. これは, 学生自身の理解状況を客観視させるメタ認知のトリガーとして機能するとともに, クラス全体の習熟度分布を作成するための基礎データとなる.
2. 理解した内容 (自由記述) : 獲得した知識やスキルを言語化させる項目である. 構成主義的な学習観に基づき, 知識の定着を確認する指標となる.
3. 理解できなかった内容 (自由記述) : 授業内で生じた疑問, 不明点, 混同している概念を抽出する. 本システムにおいて最も重要度の高い「負の教訓データ」である.
4. 総合的な感想 (自由記述) : 授業の進行速度, 教材の視認性, あるいは学習意欲の変動といった, 情意領域および環境要因に関する情報を収集する.

これらのデータはクラウド上のデータベースに構造化された状態でリアルタイムに蓄積され, 即座に次の分析フェーズへと連携される.

3) 生成AIによる多層的分析アルゴリズム

蓄積されたテキストデータに対し, 本システムではLLMに基づく生成AIを用いた多層的なテキストマイニングを実行する. 従来の単純な形態素解析とは異なり, 文脈を理解した上での意味的な分類と要約およびキーワードによるポジティブあるいはネガティブの感情分析が可能である点の特徴である. さらに定量・定性データの統合分析プロセスでは, 次に述べる言語処理を実現している. つまり, 分析に際しては, 単なる要約に留まらず, 「学生が共通して誤解している統計学的概念を3点抽出し, それを解消するための復習プランを提示せよ」というロールプレイ型のプロンプトを用いた.

1. 理解度点数の集計と傾向分析

各学生が回答した理解度点数を集計し, クラス全体の平均理解度や分布を算出する. これにより, 教員は授業内容が全体としてどの程度理解されたか, あるいは特定の概念で理解度が低い学生が多いかといった定量的な傾向を瞬時に把握できる. 時系列で点数を追うことで, 学習効果の推移も可視化される.

2. 要約と構造化

100件近くの自由記述をAIが読み込み, 主要なトピックごとに要約を生成する. 「多くの学生が理解した点」と「多くの学生が理解できていない点」を整理し, 教員が数分で全体像を把握可能なエグゼクティブ・サマリーを出力する.

3. 問題点のクラスタリングと類型化

「理解できなかった内容」に含まれる具体的な質問や疑問点をAIが抽出し, 意味内容の類似性に基づいてクラスタリングを行う.

例: 「帰無仮説の棄却が理解できない」「有意差ありの解釈が曖昧」といった個別の記述を, AIが「仮説検定の結論の導出」というカテゴリに集約する. このように, 多様な質問を共通の概念へクラスタリングすることで, 教員は個別の事象への対応に終始することなく, クラス全体が直面している「ボトルネック」を的確に特定することが可能となった.

4. セマンティック・キーワード抽出

記述内容から, 「 p 値」「有意水準」「絶対参照」といった専門用語を抽出し, それが肯定的文脈で使われているか, 否定的文脈で使われているかを感情分析によって判別する. これを復習で必要とするキーワードとして蓄積する.

本システムの最終出力は、教員向けの分析レポートだけではない。分析結果に基づき、次回の授業冒頭で学生に提示するための復習計画の具体的内容を提案することにある。教員はこのドラフトを確認・微修正し、次回の授業の導入として活用する。このRP提出から復習計画の策定までにかかる時間は、従来の手作業と比較して劇的に削減されており、教員は学生の理解分析ではなく、理解するための対策の検討にリソースを集中させることが可能となった。

4) リハビリテーション教育における本システムの意義

学習評価には、成績をつけるための総括的評価と、学習改善のための形成的評価がある。本システムは後者を強力に推進する。学生をつまづきに対し、翌週の授業で即座に介入（復習・補足）を行うことで、誤った理解のまま単元が進むことを防ぎ、知識の定着率を向上させる。これは、積み上げ式のカリキュラムである数理・データサイエンス教育において極めて重要なアプローチである。

学生の理解度に応じた柔軟な学習プログラムは本活動における最大の独自性である。学生は、自分たちが提出したRPのデータがAIによって分析され、集計され、授業内容を変化させていくプロセスを毎週目の当たりにする。自分たちの声が、システムを通じて授業を柔軟に変えたという原体験は、まさにMDASHが目指すデータを活用して課題を解決するプロセスの実演に他ならない。教員がPowerPointで統計を説くだけでなく、授業運営そのものがデータサイエンスの実践例となることで、学生はデータ活用の有用性を肌感覚として理解できる。これは、将来、臨床現場で患者データを分析し、リハ計画を修正するEBPの思考プロセスと相似形を成すものである。

AIによって抽出された学習上の問題点をクラス全体で共有することは、学生に対して「わからないのは自分だけではない」という安心感を与え、質問することへの心理的ハードルを下げる効果が期待できる。また、学生のフィードバックが授業に反映されることで、学生は受動的な受講者から、授業を共に創り上げる参加者へと変容することが期待できる。この主体的・協働的な態度の醸成は、チーム医療を担う専門職の育成において不可欠な素養である。生成AIを活用した授業改善支援システムは、医療系学生が抱える数理・データサイエンスへの苦手意識を軽減し、教員の教育リソースを最適化する有効な手段である。

【まとめ】

本稿では、リハ専門職養成課程における数理・データサイエンス・AI教育の認定制度（MDASH）に認定される教育の導入に伴う課題に対し、Classroomと生成AIを融合させた「授業改善支援システム」の設計とその運用、ならびに教育的意義について論じた。

本活動の核心は、医療系学生が抱く情報科学や統計学への心理的・技術的障壁を、ICTとAI技術を用いた「個別最適化されたフィードバック」と「データ活用の原体験」によって克服しようとする点にある。結論として、本システムは単なる教務の効率化ツールにとどまらず、学生と教員双方の意識変容を促し、Society 5.0時代に求められるリハ専門職の育成基盤として機能することを示唆している。以下に、本実践から得られた知見と今後の展望を総括する。

第一に、生成AIを活用した定性データ分析の有効性と即時性である。従来、約100名規模の講義において、自由記述のRPを用いた形成的評価を行うことは、教員のリソース制約

上、極めて困難であった。しかし、本システムにおいて大規模言語モデル (LLM) を導入することで、記述内容の要約、分類、感情分析をリアルタイムに近い速度で実行可能とした。これにより、学生の「つまずき」や「誤概念」を授業直後に可視化し、次回の授業設計へ即座に反映させて短い改善周期で回す教育サイクルが確立された。これは、従来の「計画されたカリキュラムを消化する」静的な授業運営から、「学生の理解度に応じてカリキュラムを柔軟に最適化する」動的な授業運営への転換を意味する。教育工学における形成的評価の理想形を、現代のテクノロジーが実用レベルで具現化した事例と言える。

第二に、学習者のメタ認知と主体的参加の促進である。本システム運用における特筆すべき教育効果は、学生が「自分たちのデータが授業を変える」というプロセスを体験する点にある。自身の提出したRPが集計・分析され、翌週の講義内容や復習計画としてフィードバックされる過程を目の当たりにすることは、データサイエンスの有用性を理屈ではなく経験として理解させる強力な「隠れたカリキュラム」として機能する。また、AIによって抽出された「クラス全体の理解度の傾向」や「共通の疑問点」を共有することは、数学や統計に対する個人の不安を相対化し、学習コミュニティとしての連帯感を生み出す効果をもたらした。これは、初学者が陥りやすい孤立感を防ぎ、心理的安全性を担保した上で、主体的に学習に関与する態度を醸成するものである。

第三に、リハ臨床能力 (コンピテンシー) との高い親和性である。本活動で構築した「学生の理解度データ収集 → AIによる分析・課題抽出 → 授業介入 (復習) → 効果検証」という一連のサイクルは、リハ臨床における「患者情報の収集→検査・測定 (評価) → 統合と解釈 (問題点の抽出・治療プログラムの立案) → 治療プログラムの実施→再評価 (効果判定)」というEBPのプロセスと完全に相似形を成している。

すなわち、本システムを用いた授業を受けること自体が、臨床推論のプロセスをデータサイエンスの文脈で先行体験することに他ならない。教員がデータを基に授業を改善する姿をモデリングすることで、学生は将来、自身が臨床家として患者のデータを前にした際、どのように科学的根拠に基づいた意思決定を行うべきかの指針を無意識のうちに学習していると言える。これは、MDASH教育と専門教育を有機的に統合し、単なるスキル習得を超えた「データに基づき思考する医療人」を育成するための重要な教育的示唆を含んでいる。

最後に今後の展望と課題について述べる。一点目は、AIプロンプトエンジニアリングの高度化と分析精度の向上である。現在は汎用的なLLMモデルを用いているが、リハ領域特有の専門用語や文脈をより正確に解釈させるためには、ファインチューニングや検索結果、取得情報をもとに生成精度を高めるRAG (Retrieval-Augmented Generation: 検索拡張生成) 技術の応用が検討される。また、学生の記述内容に含まれる微細なニュアンスや、潜在的な救済シグナルを見逃さないための、人間 (教員) によるモニタリング体制との最適な協働バランスの模索も継続的な課題である。

二点目は、長期的・縦断的な教育効果の検証である。本稿では単年度の授業実践における即時的な効果に焦点を当てたが、本システムで学習した学生が、高学年次における臨床実習や卒業研究、さらには卒業後の臨床現場において、実際にデータサイエンスの手法をどの程度活用できているかを追跡調査する必要がある。特に、国家試験合格率や就職後のキャリア形成といったアウトカム指標との相関を分析することで、本教育プログラムの真

の価値が実証されるであろう。

三点目は、システムの汎用性と他科目への展開の可能性が挙げられる。本システムは、多くの教育機関でも利用されているGoogle Workspace for Educationを基盤としているため、他大学や他分野への水平展開が極めて容易であるという特長を有する。今後は、リハビリテーション教育に留まらず、看護師、薬剤師、介護福祉士らを対象とした多職種連携教育 (IPE) の場においても本システムを展開し、職種の壁を超えた共通言語としての「データサイエンス教育」の標準モデルを構築していくことが期待される。

結論として、医療のデジタルトランスフォーメーションが加速する現代において、リハビリ教育もまた、そのあり方を根本から再定義する時期に来ている。従来の経験と勘のみに頼るのではなく、データとエビデンスを味方につけ、AIという新たな知的道具を批判的かつ創造的に使いこなす能力。それこそが、次世代の患者のQOL (Quality of Life) を最大化するために不可欠な資質である。本活動で提案したClassroomとAIを活用した教育システムは、その変革への小さな、しかし確実な第一歩である。

【参考文献】

- 1) 文部科学省：数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度 (MDASH)
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/00001.htm(参照2026-3-25)
- 2) 内閣府：Society 5.0, https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/(参照2026-3-31)
- 3) 内閣府：教育・人材育成ワーキンググループ,
<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kyouikujinzai/index.html>(参照2026-3-31)
- 4) 本田浩也他：専門職大学・理学療法学科学生における国家試験の得点と科目成績および学修行動の関連性の検証, びわこ健康科学 4 (0), 9-16, 2025
- 5) 丸山拓朗：アンケート調査を用いた新人教育システムにおける改善策の検討, 日本理学療法士協会, 理学療法学Supplement 2015, 1753, 2016
- 6) 西本実苗他：大学生における「データ分析」のイメージテキストマイニングを用いた分析一, 情報教育シンポジウム論文集 2024, 302-306, 2024
- 7) 森健次郎他：テキストマイニングを用いた大学生および専門学生の物理療法に対する認識と関心に関する探索的分析, 物理療法科学, 32 (0), 69-78, 2025
- 8) 村田嘉弘：数理・データサイエンス・AI教育の現状と課題, 長崎大学 経営と経済, 105(1-2), 77-103, 2025
- 9) 後藤尚弘：ChatGPTとアダプティブ・ラーニング, 日本環境共生学会, 環境共生, 1-2, 2023
- 10) 石田智敬：D.ウィリアムによる形成的アセスメントの理論と実践, 京都大学大学院教育学研究科紀要, 67, 179-192, 2021
- 11) 前林清和他：アクティブラーニング-理論と実践, デザインエッグ社, 2015

大治町 100 歳大学における作業療法学専攻教員による取り組みの紹介

清水 一輝 外倉 由之

愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

An Introduction to Occupational Therapy Faculty Initiatives at the Oharu Town 100-Year-Old University

Shimizu Kazuki Tokura Yoshiyuki

【要旨】

大治町は 2025 年度に、人生 100 年時代を見据え、誰もが生涯活躍できるウェルビーイングの高い健康長寿社会の実現に向けたまちづくりを推進し、町民の健康増進を図るために、「大治町 100 歳大学」を開設した。この取り組みは、行政・大学・地域住民の協働によって運営されているが、本報告では、作業療法学専攻教員が今年度実施した講義内容を報告する。初回の講義では、身体・認知機能測定および健康状態に関する各種アンケートを実施した。測定した結果は、サルコペニアやフレイルの基準値を十分に満たす結果であった。また、活動日記を基にした講義を実施し、生きがい感や生活満足度の向上を目的として自分らしい活動について振り返り、自分らしい活動を他者と共有する機会を設けた。今後も作業療法の知見を活かした実践を通して地域在住高齢者の健康を支援できるよう、講義内容の検討を続けていきたい。

キーワード：介護予防 官学連携事業 作業

【はじめに】

大治町は 2025 年度に、人生 100 年時代を見据え、誰もが生涯活躍できるウェルビーイングの高い健康長寿社会の実現に向けたまちづくりを推進し、町民の健康増進を図るため、「大治町 100 歳大学（以下、100 歳大学）」を開設した。100 歳大学の基本目標は、アクティブシニアの育成、地域貢献シニアの育成、つながりと支え合いの仕組みづくりである。100 歳大学では、事業評価等を行う運営委員会を設置するとともに、中部大学や愛知医療学院大学（以下、本学）との連携、地域住民との協働を図り運営をおこなっている。

100 歳大学は、町内に住所を有する 65 歳以上で、開設期間を通じて通学できる方を対象としている。入学定員は 20 名、授業料は年額 3,000 円である。修業年限は 1 年で、6 月から 3 月にかけて開校される。講義は、運動、栄養、社会参加・脳の活性化の 3 つのテーマを基本構成としたプログラムで構成されている。2025 年度は、運動に関する講義 10 コマ、栄養に関する講義 8 コマ、社会参加・脳の活性化に関する 16 コマで構成されており、入学式、社会見学、卒業旅行、卒業式などの行事も含め 23 日間のプログラムとなっている。

【作業療法学専攻教員の担当講義】

2025年度は、運動に関する講義10コマのうち8コマを作業療法学専攻教員が担当している。講義計画は表1に示すとおりである。なお、本報告では2025年度に開講済みの5コマ(6/24, 7/1, 9/30, 12/2)の実施内容を報告する。

表1 作業療法学専攻教員が担当している講義概要

日程	テーマ	概要
6/24	身体・認知機能測定 (事前) 体力づくりについて	<ul style="list-style-type: none"> 身体・認知機能測定項目：5m歩行, Timed Up and Go test (以下, TUG), 5回立ち上がりテスト, 開眼片足立ち, 握力, Mini-cog, 主観的健康観, 生きがい尺度 Ikigai-9 (以下, Ikigai-9), 自記式作業遂行指標 SOPI : Self-completed Occupational Performance Index (以下, SOPI) 体力づくりについての講義, 自分でできる運動の紹介
7/1	測定結果返却 活動日記について	<ul style="list-style-type: none"> 身体・認知機能測定の結果返却 “作業”と健康についての講義, 活動日記のオリエンテーション
9/30	活動日記	<ul style="list-style-type: none"> 各自で記載した活動日記について分析及び今後の計画を立案し, その内容をグループで共有する
12/2	活動日記	<ul style="list-style-type: none"> 各自で記載した活動日記について分析及び今後の計画を立案し, その内容をグループで共有する
3/10	身体・認知機能測定 (事後) 活動日記の分析	<ul style="list-style-type: none"> 身体・認知機能測定項目：事前の測定と同様 各自で記載した活動日記について分析及び今後の計画を立案し, その内容をグループで共有する
3/17	測定結果返却	<ul style="list-style-type: none"> 各事後の身体・認知機能測定の結果を返却

1回目 (6/24) : 身体・認知機能測定, 体力づくりについて (2コマ)

身体機能測定は、介護予防ガイド 実践・エビデンス編¹⁾を参考に5m歩行, TUG, 開眼片足立ち, 5回立ち上がりテスト, 握力測定を実施した。認知機能測定では、3語の即時再生と遅延再生と時計描画を合わせたスクリーニング検査である Mini-Cog²⁾を実施した。その他、「あなたの健康状態は次のどれに近いですか」という問いに4件法で回答する主観的健康観, 生きがいを感じている精神状態を測定する9項目に5件法で回答する Ikigai-9³⁾, 個人にとって価値のある活動の参加状況を測定する9項目について、過去1ヶ月の満足度を5件法で聴取する SOPI⁴⁾を実施した。

2回目 (7/1) : 測定結果返却, 活動日記について (1コマ)

初回に実施した身体・認知機能測定の結果を返却した。結果の返却と併せて、各測定項目の結果の基準値について説明した。測定結果については後述する。

その後、作業療法で用いる活動日記⁵⁾(図1)を紹介した。活動日記とは、日々の活動の経験と満足度をセルフモニタリングするツールであり、活動日記を用いた地域在住高齢者に対するアプローチにより、生きがい感や生活満足度の向上などの効果があるとされている^{5,6)}。

今回の講座では、担当講義日程が数ヶ月に1回の頻度であったため、活動日記の使用方式⁵⁾を一部改変して実施した。具体的には、毎日活動の記録をするのではなく、週に1回は印象に残った活動を記録するよう、1月あたり7個の活動を記録できるような書面を渡した。

月 日()	したこと	感じたこと	満足度
<input type="checkbox"/> 人と交流した	<input type="checkbox"/> 頑張った		😊😊😊😊😊
<input type="checkbox"/> 人のためになった	<input type="checkbox"/> 物事を進めた・終えた		
<input type="checkbox"/> 楽しんだ	<input type="checkbox"/> うまくできた・いった		
<input type="checkbox"/> リフレッシュした	<input type="checkbox"/> 新しいものを得た		
明日したいこと			

月 日()	したこと	感じたこと	満足度
<input type="checkbox"/> 人と交流した	<input type="checkbox"/> 頑張った		😊😊😊😊😊
<input type="checkbox"/> 人のためになった	<input type="checkbox"/> 物事を進めた・終えた		
<input type="checkbox"/> 楽しんだ	<input type="checkbox"/> うまくできた・いった		
<input type="checkbox"/> リフレッシュした	<input type="checkbox"/> 新しいものを得た		
明日したいこと			

月 日()	したこと	感じたこと	満足度
<input type="checkbox"/> 人と交流した	<input type="checkbox"/> 頑張った		😊😊😊😊😊
<input type="checkbox"/> 人のためになった	<input type="checkbox"/> 物事を進めた・終えた		
<input type="checkbox"/> 楽しんだ	<input type="checkbox"/> うまくできた・いった		
<input type="checkbox"/> リフレッシュした	<input type="checkbox"/> 新しいものを得た		
明日したいこと			

月 日()	したこと	感じたこと	満足度
<input type="checkbox"/> 人と交流した	<input type="checkbox"/> 頑張った		😊😊😊😊😊
<input type="checkbox"/> 人のためになった	<input type="checkbox"/> 物事を進めた・終えた		
<input type="checkbox"/> 楽しんだ	<input type="checkbox"/> うまくできた・いった		
<input type="checkbox"/> リフレッシュした	<input type="checkbox"/> 新しいものを得た		
明日したいこと			

月 日()	したこと	感じたこと	満足度
<input type="checkbox"/> 人と交流した	<input type="checkbox"/> 頑張った		😊😊😊😊😊
<input type="checkbox"/> 人のためになった	<input type="checkbox"/> 物事を進めた・終えた		
<input type="checkbox"/> 楽しんだ	<input type="checkbox"/> うまくできた・いった		
<input type="checkbox"/> リフレッシュした	<input type="checkbox"/> 新しいものを得た		
明日したいこと			

😊	◎	1 点 =	点
😊😊	◎	2 点 =	点
😊😊😊	◎	3 点 =	点
😊😊😊😊	◎	4 点 =	点
😊😊😊😊😊	◎	5 点 =	点
合計	7 個		7/35点

繋がり	人と交流した	◎
貢献	人のためになった	◎
楽しさ	楽しんだ	◎
癒し	リフレッシュした	◎
努力	頑張った	◎
進展	物事を進めた・終えた	◎
上出来	うまくできた・いった	◎
獲得	新しいものを得た	◎

図1 参加者に配布した活動日記(活動日記の様式⁷⁾から引用)

3, 4 回目 (9/30, 12/2) : 活動日記について (1 コマ)

3, 4 回目の講義は、2 回目の講義で配布した活動日記を元に講義を実施した。ワークシート(図2)をもとに、2 回目の講義以降の活動日記を振り返り、自分らしい活動を1つ取り上げ、その活動を通じて感じたことを改めて記載してもらった。その後、グループでその活動について共有した。グループは自由に組んでいただき、1人当たり5分での実施とした。共有が終わった後には、活動を振り返ったり他のメンバーの話を聞いたりして、今後したい/してみたい活動について考えてもらった。

①活動日記の振り返り	②今後したい/してみたい活動
活動：	活動：
感じたこと（活動の傾向：満足度、経験）：	理由：

図2 活動日記の講義で使用したワークシート

【身体・認知機能測定の結果】

令和7年度は30名が入学し、男性8名、女性22名、平均年齢は75.1±5.38歳であった。事前の身体・認知機能測定結果概要を表2に示す。

表2 身体・認知機能測定の結果概要

測定項目	平均±標準偏差（単位）
5m歩行	1.55±0.24（秒/m）
TUG	6.86±1.42（秒）
5回立ち上がり	8.23±1.88（秒）
開眼片足立ち	33.72±22.56（秒）
握力平均	（男性）36.0±9.72（kg） （女性）22.5±3.69（kg）
主観的健康観	3.2±0.61（点）
Mini-cog	4.66±0.86（点）
Ikigai-9	35.13±6.18（点）
SOPI	37.17±5.06（点）

身体機能測定的项目は、全てサルコペニアやフレイルの基準値¹⁾を十分に満たしていた。また、Mini-cogの基準値⁷⁾や、SOPIの地域中高年者の平均⁸⁾を上回る結果であった。その他、Ikigai-9については、平均値等が示されておらず集団と視点相対的評価は意味がないとされているが、60歳以上の地域高齢者を対象とした測定結果³⁾と比較するとそれを上回った数値であった。なお、100歳大学で実施するデータ収集等に関しては、本学の倫理委員会の承認を受けて実施している（承認番号25006）。

【活動日記の記録や共有を通じた対話の様子】

参加者の方の多くが1月あたり7つ全ての活動を記録して参加されていた。活動日記を用いて自分らしい活動の共有をする際には、自身の活動について積極的に話をされ、活発なコミュニケーションが行われていた。また、他者の取り上げた活動について、関心を持って質問等する様子も見られた。

【おわりに】

2025年度から始まった新しい取り組みである100歳大学において、作業療法学専攻教員が実施している講義内容について報告した。2025度の100歳大学行事は2026年3月の卒業式が最後であり、取り組みの途中経過の報告となっている。1年間を通した取り組みの成果や参加者の変化については、100歳大学の成果として今後検証をしていきたい。

今年度の担当講義で実施した、自分らしい活動を他者と共有する経験は、生きがい感や生活満足度の向上などの効果があるとされている^{5,6)}が、今年度の取り組みに関する成果測定は十分に行えていない。また、講義の頻度や時間などの講義計画についての検討も不十分であったため、どのような講義計画が講義の成果をより高めることにつながるのかについて今後検討をしていきたい。

【文献】

- 1) 荒井英典, 山田稔: 介護予防ガイド 実践・エビデンス編. 国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター, 愛知, 2021, pp.220-224.
- 2) Borson S, Scanlan JM, Chen P, et al: The Mini-Cog as a screen for dementia: validation in a population-based sample. J Am Geriatr Soc. 2003 ; 51(10) : 1451-1454.
- 3) 今井忠則, 長田久雄, 西村芳貢: 生きがい意識尺度 (Ikigai-9) の信頼性と妥当性の検討. 日公衛誌. 2012 ; 59(7) : 433-439.
- 4) 今井忠則, 齋藤さわ子: 個人にとって価値のある活動の参加状況の測定—自記式作業遂行指標 (SOPI) の開発—. 作業療法. 2010 ; 29(3) : 317-325.
- 5) 高木雅之, 其阿弥成子, 織田靖史, ほか: 活動日記を用いた集団プログラムが地域在住高齢者の作業に対する満足度に与える効果—ランダム化比較試験—. 作業療法. 2020 ; 39(3) : 301-310.
- 6) 高木雅之, 橋本康太, 坂本千晶, ほか: 作業の記録と対話を中心とした介護予防教室. 作業療法. 2023 ; 42(3) : 353-360.
- 7) 県立広島大学.活動記録の様式【ダウンロード】—活動日記 (2022年4月作成). https://drive.google.com/drive/folders/1BW__JYNrxWJZiDIcOUUKFPaCn0aTJWOH (参照 2025-11-28)
- 8) Ribeiro Filho ST, Lourenço RA : The performance of the Mini-Cog in a sample of low educational level elderly. Dement Neuropsychol.2009 ; 3(2) : 81-87.
- 9) 今井忠則, 齋藤さわ子: 意味ある作業の参加状況が健康関連 QOL に及ぼす影響—健康中高年者を対象とした6ヶ月間の追跡調査—. 作業療法. 2011 ; 30(1) : 42-51.

「清須市民げんき大学」のレクリエーション演習における 「楽しさ」を構成する要因

外倉 由之 加藤 真夕美 清水 一輝

愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

Factors that Constitute “Fun” in Recreational Exercises at “Kiyosu Shimin Genki Daigaku”

Tokura Yoshiyuki Kato Mayumi Shimizu Kazuki

【要旨】

本研究は、清須市民げんき大学におけるレクリエーション演習がげんき大学の受講生（以下、げんき大学学生）に与える心理的影響と「楽しさ」の構成要素を明らかにすることを目的とした。げんき大学学生 26 名を対象にレクリエーション効果チェックリストと高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法（Leisure Activity Enjoyment Scale：以下 LAES）を用いて評価を行った。その結果、精神的・情緒的側面の得点が高く、LAES では「過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ」と「人と関わる楽しさ」が最も高かった。本研究は、レクリエーション演習における楽しさの性質を明確にし、今後の質向上に有用な示唆を与えるものであった。

キーワード：清須市民げんき大学 レクリエーション演習 楽しさ

【はじめに】

1. 背景

わが国は、世界でも有数の長寿国であり、令和 6 年度版高齢社会白書¹⁾によると 65 歳以上が総人口に占める割合は 29.3%となっている。そのため、高齢者の健康寿命延伸に資する介護予防の取り組みを図り、いかにによりよく生きるかという生活の質（Quality of life: 以下 QOL）がますます重要となっている。森山ら²⁾によると QOL 向上には、他者との交流を図り、孤独や孤独感を解消したり、人との関係での楽しさや喜びを見出したりすることもできるレクリエーション活動の充実は欠かせないと述べられている。また、その実現のための重要な要因の一つとして「楽しさ」があげられている³⁾。

愛知医療学院短期大学（以下、本学）においても愛知県清須市と、官学連携事業として一般介護予防事業である「清須市民げんき大学」（以下、げんき大学）を開設し、参加される高齢者が介護予防の必要性を理解し、健やかで元気に過ごすことへの支援と、介護予防活動の担い手として参加できる人材育成を目指して、約 1 年間（全 16 回）で介護予防の知識・実践を学ぶ高齢者向けの講座を実践している⁴⁾。講座の一つであるレクリエーション演習では、他者との相互関係を伴う活動である「交流」の要素も有しており、高齢者の社会参加を促す地域共生という視点も含まれている。

筆者は介護予防・生活支援の効果を期待してげんき大学の講座の一つである「レクリエーション演習」を担当しており、令和2～5年度のレクリエーション演習の事後レポート内容である「レクリエーションを実施した感想」をKH Coderで分析した。その結果、頻出語では「楽しい」「学生」が多く、共起ネットワーク分析においては「学生」「楽しい」「レクリエーション」のつながりより①交流の場のきっかけ、「昔」「思い出す」「遊び」のつながりより②回想を通じた生きがい感の充足、「過ごす」「考える」「一緒」「若い」といったつながりより③自己の能力・叡知・経験を社会に活用できることを実感する機会となっていることが示唆された⁵⁾。

しかし、レクリエーションの現状として、重要性は認識されている一方で、ニーズに応じた効果的なレクリエーションの提供が十分とはいえず、また目的意識を持った展開が行われていないという課題も指摘されている²⁾。げんき大学のレクリエーション演習においても具体的に楽しさが、どのような性質を持っているのかは不明である。

そこで、本研究ではレクリエーション演習から得られる効果をレクリエーション効果チェックリストから評価し、「楽しさ」がどのような性質を持っているのかはLAESを用いて評価することで、今後のレクリエーション演習の質向上に寄与すると考えられる。さらに、楽しさは活動継続の重要な要因であり、高齢者のQOL向上とも密接に関連することから、その構成要素を明らかにする意義は大きい。

2. げんき大学のレクリエーション演習の概要

1回あたり1時間の講座を2講座実施し、前半を「準備」、後半を「演習」としている。本学作業療法学専攻学生（以下、OT学生）とげんき大学学生との交流の場や介護予防・生活支援を到達目標として実施している。げんき大学学生が企画したレクリエーションをOT学生へ実践する演習である。

1) レクリエーション演習準備

レクリエーション演習準備では、担当教員がげんき大学学生に演習の概要・目的を伝えた後、げんき大学学生5～6名が1グループとなり計5グループが主体的に集団レクリエーションの時間配分・内容等を各グループで話し合いながら計画立案・準備を行う。

今回、げんき大学学生が企画した各グループのレクリエーション内容は、あやとり、缶ぽっくり（作成方法の指導）、はんかち落とし、お手玉、地域文化を伝えるであった。各活動は椅子座位で実施しており、いずれも低運動強度で身体的な負荷は少ない特徴がある。

2) レクリエーション演習当日

げんき大学学生を主体に、計画内容にそってOT学生に集団レクリエーションを約30分間実施する。参加したOT学生は本学3年生であり、各グループに対して、3名程度配置した。

【対象】

令和7年度げんき大学レクリエーション演習に参加したげんき大学学生26名を対象に実施した。今回の研究目的を伝え、レポートの研究利用に同意する場合には同意欄にチェックをするよう求めた。同意欄にチェックをした26名(回収率100%)を今回の分析対象とした。内訳は男性4名(平均年齢70.5±4.7歳)、女性22名(平均年齢70.3±3.8歳)を対象と

した。なお本研究は、本学の研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 24011）。

【方法】

レクリエーション演習から得られる効果に関する評価としてレクリエーション効果チェックリストを用いた（表 1）。レクリエーション効果チェックリストの評価項目は身体的、精神的、情緒的に区分された 10 項目の内容をそれぞれ 5 段階の評定（大変良い：+2 点，少し良い+1 点，変化なし：0 点，やや悪い：-1 点，大変悪い：-2 点）で構成されている。

表 1 レクリエーション効果チェックリスト
（レクリエーション効果チェックリストの様式⁶⁾より引用)

○印をつけてください	大変 良い	少 し 良 い	変 化 な し	や や 悪 い	大 変 悪 い
1 楽しかったですか？					
2 気分がよくなりましたか？					
3 充実・満足しましたか？					
4 達成感が得られましたか？					
5 精神的な疲れがとれましたか？					
6 からだの疲れがとれましたか？					
7 からだの調子がよくなりましたか？					
8 肩や首のこりがとれましたか？					
9 今日はぐっすり眠れそうですか？					
10 食事がおいしく食べれそうですか？					

レクリエーションの楽しさに関する性質を把握する評価として LAES を用いた（表 2）。LAES は人間作業モデルを理論的基盤としており、対象者が経験した余暇活動を抽出して、その余暇活動の楽しさの特徴を把握する評価法である。評価のプロセスは抽出された余暇活動について、対象者が楽しさに関する 18 項目の質問に 4 段階（1～4 点）で評価する。合計点数によって、評価された余暇活動が 5 つの構成要素「過去・現在・未来に思いを広げる楽しさ」「人と関わる楽しさ」「考える楽しさ」「達成感による楽しさ」「心や体が肯定的に変化する楽しさ」に分類される。これにより、対象者が余暇活動に対して感じている楽しさの全体的な傾向を把握することができるものである。

レクリエーション演習終了間際に、レクリエーション効果チェックリスト及び LAES の評価用紙を対象者に配布し、実施した。各用紙は無記名で回答を依頼し、記載・提出時には研究者が席を外し、参加者が自由に提出場所へ提出できるようにした。

統計処理は、レクリエーション効果チェックリストでは、同一対象者における 10 項目の得点差を検討するために Friedman 検定を行い、有意差が認められた場合には Holm 補正 Wilcoxon 符号付順位検定による事後比較を実施した。LAES についても同様に Friedman 検定後に Holm 補正 Wilcoxon 符号付順位検定による多重比較を行った。統計的有意水準は $p < 0.05$ とした。なお、統計解析には JSTAT for Windows (Version 13.0) を用いた。

表2 LAES (LAESの様式⁷⁾より引用)

この余暇活動は		とても そう思う	やや そう思う	やや そう思わ ない	とても そう思わな い	過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ (設問1・2・3・4・9)	/20点
1	思い出だけでも楽しい					人と関わる楽しさ (設問6・7・15)	/12点
2	好きである					考える楽しさ (設問8・14・17)	/12点
3	思うとやってみたくなる					達成感による楽しさ (設問5・10・11・13)	/16点
4	準備をすることから楽しい					心や体が肯定的に変化する楽しさ (設問12・16・18)	/12点
5	体を使うことが楽しい						
6	仲間と行えるから楽しい						
7	人と話をしながら行うのが楽しい						
8	様々なことを考えながら行うと楽しい						
9	すること自体が楽しい						
10	人に褒められる・喜ばれるなど人に認めてもらえると楽しい						
11	成果を予想できるから楽しい						
12	心や体が気持ち良くなるから楽しい						
13	努力するとよい結果が出るから楽しい						
14	様々なことに気づけるから楽しい						
15	新たな仲間ができるから楽しい						
16	自分を成長させてくれるので楽しい						
17	よいアイデアが浮かぶなど創造性が広がるから楽しい						
18	心が落ち着くから楽しい						

【結果】

レクリエーション効果チェックリスト及び LAES の評価用紙ともに回収率 100%であり、全てを分析対象とした。

1. レクリエーション効果チェックリスト得点について

図1に演習実施後のレクリエーション効果チェックリスト得点を示す。Friedman 検定の結果、レクリエーション効果チェックリストの10項目間には有意な得点差が認められた ($p < 0.001$)。そこで、Holm 補正 Wilcoxon 符号付順位検定による事後比較を行った。最も得点が高かったのは「1. 楽しかったですか (楽しさ)」であり、 1.92 ± 0.27 点が示された。続いて「2. 気分がよくなりましたか (気分)」が 1.81 ± 0.63 点、「3. 充実・満足しましたか (充実・満足)」が 1.77 ± 0.51 点と精神的・情緒的な側面に関する項目が高得点であった。一方、身体的な変化に関する項目は相対的に得点が低く、「8. 肩や首のこりがとれましたか」は 0.96 ± 0.82 点と最も低かった。

各項目間の事後比較の結果、「1. 楽しかったですか」の項目は「5. 精神的な疲れがとれましたか」「6. からだの疲れがとれましたか」「8. 肩や首のこりがとれましたか」との間に有意差が認められた ($p < 0.05$)。同様に「2. 気分がよくなりましたか」の項目も、精神的疲労 (項目5) および身体の疲れ (項目6) と比較して有意に高い得点を示した ($p < 0.05$)。また、「3. 充実・満足しましたか」は精神的疲労 (項目5) および「8. 肩や首のこりがとれましたか」との間に有意差が認められた ($p < 0.05$)。一方、「4. 達成感が得られましたか」、「7. からだの調子がよくなりましたか」、「9. 今日はぐっすり眠れそうですか」、「10.

「食事がおいしく食べられそうですか」においては、有意な差は認められなかった。

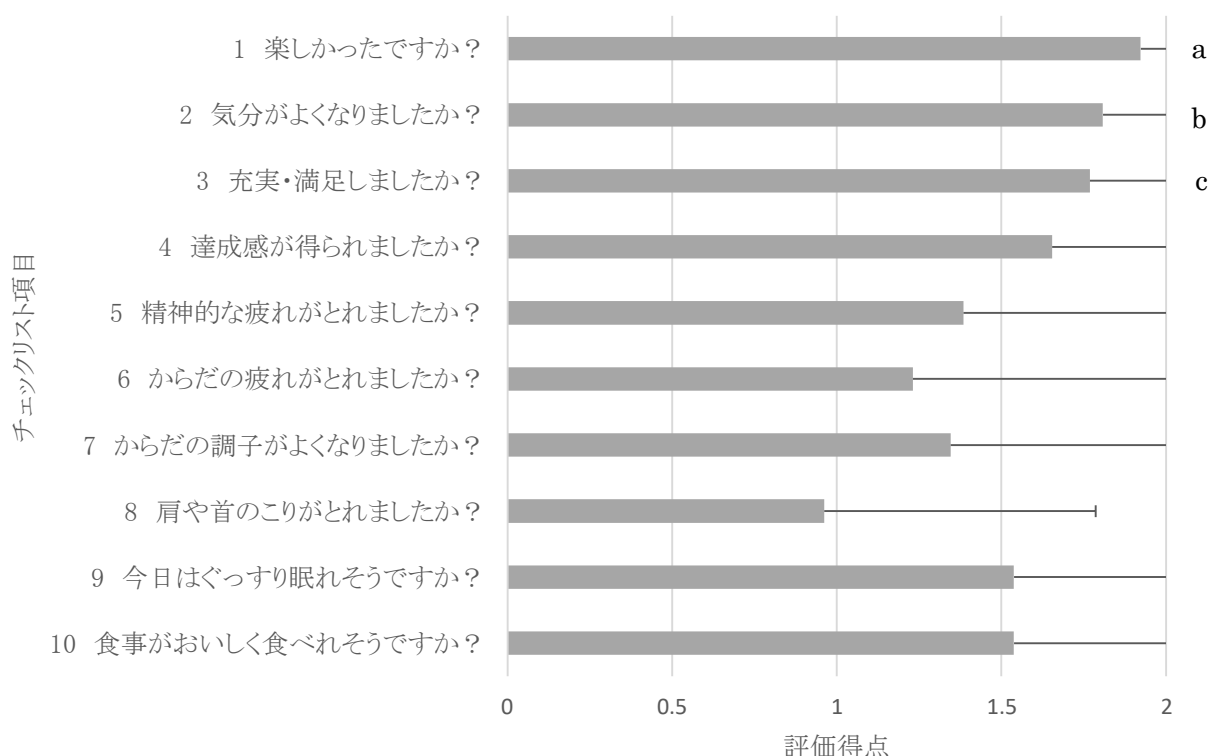


図1 レクリエーション演習実施後のレクリエーション効果得点

a : 項目1は、項目5・6・8より有意に高値を示した ($p < 0.05$)

b : 項目2は、項目5・6より有意に高値を示した ($p < 0.05$)

c : 項目3は、項目5・8より有意に高値を示した ($p < 0.05$)

2. LAESについて

各項目の点数結果として、「過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ」は 17.7 ± 2.2 点、「人と関わる楽しさ」は 11.5 ± 1.0 点、「考える楽しさ」は 10.9 ± 1.2 点、「達成感による楽しさ」は 14.5 ± 1.2 点、「心や体が肯定的に変化する楽しさ」は 10.6 ± 1.3 点であった。各項目間比較を実施した結果、「過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ」は、他の4項目すべてと比較して有意に得点が高かった (いずれも補正後 $p < 0.05$)。また、「人と関わる楽しさ」は「考える楽しさ」、「達成感による楽しさ」、「心や体が肯定的に変化する楽しさ」と比較して有意に高値であった ($p < 0.05$)。「考える楽しさ」は「達成感による楽しさ」よりも有意に低い値を示した ($p < 0.05$)。一方で、「考える楽しさ」と「心や体が肯定的に変化する楽しさ」との間には有意差が認められなかった。以上より、LAESの5項目間には明確な得点差が存在し特に「過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ」が最も高く評価されている傾向であったことが明らかとなった。

【考察】

本研究では、げんき大学のレクリエーション演習に参加したげんき大学学生を対象に、

レクリエーション効果チェックリスト及び LAES を用いて、レクリエーション演習がもたらす効果と「楽しさ」の性質を明らかにすることを目的とした。その結果、精神的・情緒的側面が高く評価され、LAES では「過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ」と「人と関わる楽しさ」が高得点を示した。このことは、参加者がレクリエーションを通じて感じる「楽しさ」が単一ではなく、複数の精神・社会的要素から構成される多面的な構成概念であることを示している。本研究の特徴は、げんき大学学生がレクリエーションの受け手ではなく、提供者として OT 学生に関わる構造を有していた点にある。

レクリエーション効果チェックリストの結果からは、「1. 楽しかったですか」「2. 気分がよくなりましたか」「3. 充実・満足しましたか」といった精神的・情緒的側面に関する項目が高得点を示した一方で、「8. 肩や首のこりがとれましたか」などの身体的変化に関する項目は相対的に低い傾向であった。このことは、本演習が身体機能の改善を主目的とするものではなく、心理的充実感や情緒的安定をもたらす活動として機能していたことを示唆している。これらの結果は、後述する LAES において精神的・社会的側面に関する「楽しさ」が高く評価されたこととも整合しており、本演習の特性を示す一つの根拠となる可能性があると考えられる。

LAES については、まず「過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ」が最も高得点を示したことは注目に値した。本レクリエーション演習では「昔の遊び」を題材とし、げんき大学学生が自身の経験を思い出しながら事前準備をし、学生に内容を伝えるという形式であった。野村⁸⁾は、昔の遊びをグループで回想することが受容や励まし、共感が得られることや、田高ら⁹⁾は社会的機能・認知機能の改善を示唆している報告をしており、本研究においても回想場面が多くみられたことがこの得点に影響したと考えられる。回想は過去の自己を肯定的に再構成する働きをもち、心理的安定感をもたらすことが知られている。したがって、「過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ」は単なる懐かしさにとどまらず、時間的側面（過去の想起と現在の共有、未来への見通し）が結びついた深い心理的体験であると同時に本演習目的に沿った認知機能低下予防に寄与する可能性も得られていたと考えられる。

次に、「人と関わる楽しさ」の得点が高かった点は、レクリエーション演習が役割付与型であったことと密接に関連すると考えられる。黒岩¹⁰⁾は、高齢者が「誰かのためになる役割」を持つことが生活の張りを生み、閉じこもり予防に有効であると述べている。本レクリエーション演習ではげんき大学学生が「計画する」「学生に教える」という主体的役割を担い、学生との協働を通して人と関わる機会が多く提供された。役割を担うことは有能感や達成感を高め、対人関係の活性化を促す。そのため、「人と関わる楽しさ」や「達成感による楽しさ」が高かったと考えられ、レクリエーション演習が交流促進に有効であったことが示唆される。すなわち、社会的側面（他者との協働、役割獲得）が楽しさに大きく寄与しており本演習目的の「交流の場」という目的に沿っていたと考えられる。

一方で、「心や体が肯定的に変化する楽しさ」や「考える楽しさ」は中程度の評価であった。これらは認知負荷の高い活動や身体活動量の大きいプログラムで高まりやすいとされている。レクリエーション演習は低強度で身体負荷の少ない内容であったことから、身体的変化に関する楽しさは限定的であったと予測される。しかし、「気分がよくなった」「満足した」といった心理的効果が高く得られている点から、レクリエーション演習の性質が

精神的・社会的側面にあることが再確認された。以上の結果から、本研究で得られた「楽しさ」は、精神的・情緒的な側面に関する楽しさがあり、①時間的側面（回想・現在の共有・未来への展望）②社会的側面（対人交流・役割協働）③情緒的側面（満足・気分改善・自己肯定）の三要素が相互に作用して形成される多面的な性質をもつことが示された。したがって「楽しさ」を単なる快感情として扱うのではなく、心理的・社会的意義を持つ構成概念として捉える必要性を示している。

本研究の意義は、参加者のレクリエーション演習における「楽しさ」の性質を構造的に理解し、レクリエーション演習の目的意識を持った展開に役立つ視点を提示した点にある。特に、回想を促す活動と役割付与型の構造を組み合わせることで、心理的充実感や社会的つながりが強く促進される可能性が示された。楽しさは活動継続の中心的要因であり、介護予防事業において継続的参加を確保する上でも重要である。

なお、本研究は単一地域・単一年度で実施されたため、一般化には限界がある。また、活動内容がグループごとに異なるため、どの要素がどの構成要因に寄与したのかを明確に分析することは困難であった。今後は複数年度の比較や認知機能指標との併用、活動内容の違いによる楽しさの構成要素の変動を分析することが課題である。

【おわりに】

本研究では、官学連携事業として一般介護予防事業である「げんき大学」の講座であるレクリエーション演習から得られるレクリエーション効果および楽しさの性質を明らかにした。その結果、参加者のレクリエーション演習における「楽しさ」は多層的な心理的・社会的性質を持ち、回想と役割付与がその形成に寄与している可能性が示唆された。

なお、本研究で対象としたレクリエーション演習は、げんき大学学生が OT 学生に活動内容を教える世代間交流を含む構造であったため、その影響を踏まえて結果を解釈する必要がある。一方で、本知見は今後のレクリエーション演習の質の向上を検討する上での一助となると考えられる。

今後は、異なる内容のレクリエーションや複数年度のデータに加え、同世代間で実施した場合との比較を通じて、楽しさの構成要素と継続的参加との関連を検討する必要がある。

【謝辞】

本研究の実施にあたり、調査にご協力いただいた清須市民げんき大学の皆様、研究を進めるにあたり、ご多忙の中レクリエーション演習にご協力をいただいたげんき大学関連職員の皆様に心より感謝を申し上げます。

【文献】

- 1) 内閣府：令和 6 年度版高齢社会白書
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2025/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf（参照 2025-10-14）
- 2) 森山千賀子，土井晶子：日本の高齢者施設における余暇活動の現状と課題-QOL 向上に効果的な余暇活動とは。白梅学園大学・短期大学紀要。2009；45：49-67.
- 3) 厚生労働省：健康日本 21（身体活動・運動）

https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/kenko21_11/b2.html (参照 2025-10-14)

- 4) 加藤真弓, 臼井晴信, 山下英美, 他: 清須市民げんき大学が高齢者の身体機能と食品摂取多様性スコアに及ぼす影響. 愛知医療学院短期大学紀要. 2021; 12: 52-58.
- 5) 外倉由之, 加藤真夕美, 清水一輝: 「清須市民げんき大学」のレクリエーション演習が参加高齢者に及ぼす影響-KH Coder を用いたアンケート解析-. 愛知医療学院短期大学紀要. 2023; 14: 33-44.
- 6) 前橋明, 服部伸一: レクリエーションの効果に関する研究 (II)-レクリエーション効果チェックリストの試案と疲労自覚症状調査との関連-. レクリエーション研究. 1997; 37: 70-73.
- 7) 三宮孝太, 本家寿洋: 高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法を使用した作業の提供で心臓リハビリテーションが円滑化した慢性心不全をもつ高齢女性の一事例. 作業療法. 2021; 40 (5): 674-682.
- 8) 野村信威: 地域在住高齢者に対するグループ回想法の試み. 心理学研究. 2006; 77 (1): 32-39.
- 9) 田高悦子, 金川克子, 天津栄子, 他: 認知症高齢者に対する回想法の意義と有効性-海外文献を通して-. 老年看護学. 2004; 9 (2): 56-63.
- 10) 黒岩 亮子: 日本における世代間交流の展開. 社会福祉. 2019; 59: 85-95.

[学生研究]

《卒業研究論文 第16巻 令和七年度》

[理学療法学専攻]

本学学生の排便状況と運動習慣が自律神経活動とどのような関係性があるか

安久 美由菜 木村 璃夢 (指導教員：臼井 晴信)

出生時の体格が青年期の体格及び全身持久力に与える影響

池添 晶 (指導教員：藤本 大介)

股関節と足関節の柔軟性が泳力に与える影響

卜部 結乃 (指導教員：齊藤 誠)

転倒リスク別による転倒経験とヘルスリテラシーの違い

江崎 朱梨 原 朱音 (指導教員：加藤 真弓)

足底圧刺激が平衡機能に与える影響

片桐 葵 (指導教員：齊藤 誠)

座面高の違いが車椅子の操作性に及ぼす影響について

川口 詩姫 (指導教員：木村 菜穂子)

受身の笑いと自発的笑いの自律神経活動の違い

木下 陽菜 (指導教員：臼井 晴信)

げんき大学受講生の主観的体力と客観的体力の関連及び転倒経験などの違い

桑下 志穂 (指導教員：加藤 真弓)

足関節背屈運動器の運動軸角度の違いが後脛骨筋へ及ぼす影響

境 暖大 千葉 海斗 (指導教員：山田 南欧美)

歩行速度の変化が股関節外転筋力に及ぼす影響

下垣外 陽稀 (指導教員：濱田 光佑)

本学学生における大学生生活不安感の経時的変化～学年間、専攻間の比較～

下田 こころ 高崎 美羽 (指導教員：加藤 真弓)

女子高校生ラグビー選手における練習試合前後でのTJAスコアの変化

棚田 悟常 (指導教員：齊藤 誠)

- 短時間の短縄跳び運動が垂直跳びの跳躍高に及ぼす影響
内木 愛斗 中村 優心 (指導教員：濱田 光佑)
- 地域における障がい児・者の運動・スポーツ実施の現状
長井 美成 (指導教員：加藤 真弓)
- 扁平足者のハイヒール歩行の特徴－正常足者と比較して－
橋本 滯奈 湯浅 杏菜 (指導教員：山田 南欧美 林 尊弘)
- 家庭用 VR を用いたリハビリテーション方法の提案－リーチ動作に着目して－
平井 大賀 (指導教員：山田 南欧美)
- 嚥下時における上肢の位置が舌骨上・下筋群の筋活動に及ぼす影響
福原 ジュリア (指導教員：宮津 真寿美)
- 握力測定におけるオノマトペの効果の検討
藤井 蓮 (指導教員：松村 仁実)
- ACL 損傷における mTJA 評価でのスポーツ特性の違いについて
松岡 悠奈 野田 夢瑠 (指導教員：齊藤 誠)
- スクリーンタイムが幼児の運動時間・運動能力に及ぼす影響について
宮津 茉優 (指導教員：藤本 大介)
- 記名方法の違いが直後再生，遅延再生に与える影響
武藤 宏太 (指導教員：濱田 光佑)
- 指導者の服装の色が模倣動作時の自律神経活動に及ぼす影響
森寺 沙和 (指導教員：臼井 晴信)
- 階段昇降時に歩行補助具を使用した際の下肢筋活動量の変化
八橋 鼓太郎 (指導教員：山田 南欧美)
- 投球動作が肘関節に与える影響－リリース時の肩関節外転角度に着目して－
山本 陸生 (指導教員：齊藤 誠)
- 重症心身障害児の保護者が捉える F-words の意味付け
－F-words Life Wheel を用いた質的分析－
高橋 歩花 (指導教員：藤本 大介)

5～6 歳児の運動能力の推移－11 年間にわたる運動能力調査の結果を用いて－

玉屋 匠貴 （指導教員：藤本 大介）

《卒業研究論文 第16巻 令和七年度》

[作業療法学専攻]

高齢者における余暇活動が認知機能に及ぼす影響について

青木 和古 田中 乃愛 土田 依未 (指導教員：渡邊 豊明)

過去の災害における作業療法士の実践報告

—東日本大震災、熊本地震、能登半島地震について—

木村 鼓 安藤 有希 (指導教員：廣渡 洋史)

SLRを用いた静的ストレッチ保持時間の違いによるハムストリングス柔軟性の変化

伊藤 蓮 石川 陸 (指導教員：清水 一輝)

「余暇活動」「遊び」「趣味」「はまっていること」

問いかげによって想起される作業の違い

岩瀬 鈴 千葉 咲幸 (指導教員：加藤 真夕美)

作業療法学生の希望と学業的援助要請の関係について

木下 翔 久保 ジェシカ (指導教員：横山 剛)

作業療法学生の平常時と臨床実習前の精神状態について

近藤 穂乃果 丹羽 真水 森 千紘 (指導教員：外倉 由之)

身体的ガイドを用いた利き手交換アプローチによる箸操作技能の影響について

土橋 心優 長谷川 すみれ 山下 彩羽 (指導教員：小山 隆幸)

愛知医療学院大学 紀要投稿規程

総則

1. 本誌は愛知医療学院大学の学術的進歩に寄与する論文等を掲載する。和文名は「愛知医療学院大学紀要」、英文名は「Bulletin of Aichi Medical College of Rehabilitation」とする。
2. 本誌は愛知医療学院大学附属図書館が編集する。
3. 投稿は原則として愛知医療学院大学及び愛知医療学院短期大学所属の教職員（専任・非常勤等を問わない）、専攻科学生、研究生に限る。ただし、それ以外の投稿も附属図書館の判断によって受理できる。
4. 投稿原稿の種別は原則として、原著、短報、症例報告、総説とする。ただし、活動報告、調査報告等も論文に準じた形式で投稿できる。なお、専攻科学生及び研究生の研究は、論文形式で掲載できる。
5. 論文形式での投稿原稿は他誌に未発表のものに限る。原著、短報、症例報告、総説の投稿論文の審査は査読制とし、種別の変更及び採否は附属図書館において最終決定する。必要に応じて誓約書・同意書などを貼付する。
6. 掲載された論文等の著作権は、愛知医療学院大学に帰属する。愛知医療学院大学は掲載論文を電子化または複製の形態等で公開・配布する権利を有するものとする。

原稿作成の手引き

1. 本文の長さは原著など論文形式での投稿の場合、400字原稿用紙20枚分（8000字）以内とする（一般的に英文は和文原稿用紙2マスに3文字となる）。和文原稿は10.5ポイント、英文は12ポイント、MS明朝を用いたMicrosoft社のWordで作成し、PDFに変換したものを提出する。
*和文の句点と読点は次に統一する。句点：全角ピリオド（。）読点：全角カンマ（，）。
*英数字は半角とし、フォントはCenturyで統一する。
2. 和文原稿は、A4用紙縦置きにして40文字×40行とし、余白を、上35mm、下30mm、左右25mmとする。英文は、左揃えとし行末のハイフネーションは用いない。
3. 図・表・写真は原則として本文中に組み込む。図・写真の下部（表は上部）には、図1などのように番号を記し、スペースを置いて説明をつける。文字・数字は全て本文と同じフォント・サイズにする。なお説明は、図・表に対してセンタリングで配置とする。
4. 論文原稿は以下の順に記述する。
 - ① 和文：題名、著者名、所属、英題名、著者英名の順にそれぞれ改行し、1行空ける。これらは全て12ポイント、本文と同じフォントで太文字とする。著者名の記載は、和・英名ともに姓名の順とし、姓名の間には半角スペースを入れる。複数名の場合は、著者の間を全角スペースで区切る。英名はそれぞれの1文字目を大文字とする。
 - ② 英文：英文題名、英文著者名（全員記載）、英文所属の順にそれぞれ改行し、1行空ける。全て14ポイントとし、いずれも最初の1文字だけ大文字とする。
 - ③ 要旨は1行空けて記述する。和文は400文字以内、英文は250words以内、キーワードは5語以内で全て本文と同じフォント・サイズとする。
 - ④ 本文は1行空けて以下の順に記述する。

(例として以下の言葉を使用する。ただし、内容によっては異なることもある)

- *はじめに *対象と方法 (症例と方法) *結果 (成績)
- *考察 *おわりに
- *謝辞 (科研費等の受理, 学術集会等で発表したものはその旨を記載する)
- *文献

いずれも小見出しとして【 】でくくり, 和文・英文とも本文と同じポイント, 太文字とする。小見出しの前は1行空ける。

5. 略称・略語は初出箇所では正式名称を記し, かつこ付けで略称・略語を付記する。

6. 引用文献の記載について

- ① 論文の最後に, 引用順及び本文に初出の順に番号を付けて記載する。本文中の該当箇所の右肩に数字をつけて表す (例: ¹⁾) 。
- ② 著者名は筆頭者から3名まで列記し, それ以上は, ほか または **et.al.**とする。
- ③ 引用雑誌名は略名とし, 日本語文献は「医学中央雑誌収録誌目録」, 外国文献は「PubMed」に従い, 以下の文献記載例を参照して記載する。

*文献記載順序

《雑誌》 著者名: 論文タイトル. 雑誌略名. 出版年 (西暦) ; 巻号数: 初頁-終頁.

《書籍》 著者名: 書名 版表示 (初版は省略). 出版者, 出版地, 出版年 (西暦), pp. (初頁-終頁) または p. (単頁) .

《論文集 (書籍) 中の論文》 著者名: 論文名, 書名. 編者名, 出版者, 出版年 (西暦), pp. 初頁-終頁.

《Web上の記事》 ページ作成者名. Webページの題名. URL (参照年月日) .

④ 例

- 1) 湯田京子, 松田啓一: 障害者の就労支援 重度・重複障害. 総合リハ. 2008;36:533-537.
- 2) Cooper DS, Doherty GM, Haugen BR, et al.: Revised American Thyroid Association management guidelines for patients with thyroid nodules and differentiated thyroid Cancer. *Thyroid*. 2009; 19: 1167-1214.
- 3) 中村隆一, 齋藤宏, 長崎浩: 基礎運動学 第6版補訂. 医歯薬出版, 東京, 2012, pp. 305-313.
- 4) 高見博, 村井勝: 第1章 内分泌外科総論, 内分泌外科標準テキスト. 村井勝, 高見博 (編), 医学書院, 東京, 2006, pp. 1-7.
- 5) 中央教育審議会大学分科会. 魅力ある地方大学を実現するための支援の在り方について (令和3年8月 大学分科会) .

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1411360_00006.html (参照 2021-12-01) .

7. 投稿原稿 (初稿) については Word 及び PDF 形式で保存した2つのデータを提出する。なお PDF データは, 原稿の著者名と所属を白文字にして保存したものとする。
8. レフリーによる査読は1回以上とする。
9. 完成論文については Word 及び PDF 形式で保存した2つのデータを提出する。その際プリントアウトしたものも1部提出する。
10. 原則として投稿 (初稿) は毎年度7月1日~11月末を受付期間とする。

11. 本誌は原則として毎年度4月に配布する.
12. この規程は令和6年4月1日より発効とする.

(附則)

この規定は令和6年7月1日に改定し, 改めて同日発効とする.

(附則)

この規定は令和7年7月1日に改定し, 改めて同日発効とする.

編集後記

愛知医療学院大学紀要第2号を無事に発刊できましたことを、関係各位のご尽力の賜物として感謝申し上げます。本号には、原著論文2編、短報2編、活動報告3編、計7編の掲載となっております。執筆いただいた皆様、査読・編集にご協力いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

本号には、多様な視点からの研究成果および実践報告が収められており、本学の教育・研究の広がりを示す内容となっております。近年、地域社会の課題は複雑化しており、理学療法士・作業療法士に求められる役割は多様化しています。そのような中で、本学紀要が新たな知見や実践を発信する場として、今後さらに重要な役割を担っていくものと考えます。

今後とも本紀要が、リハビリテーション教育および研究の発展に寄与する場として充実していくよう努めてまいります。引き続き、皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

附属図書館 紀要担当
清水 一輝

〈附属図書館 紀要編集担当〉

石井 文康 (リハビリテーション学部作業療法学専攻)
清水 一輝 (リハビリテーション学科作業療法学専攻)
齊藤 寛子 (統括管理部)

愛知医療学院大学紀要

第2号

発行日 令和8年3月31日
発行者 学校法人 佑愛学園
愛知医療学院大学・短期大学
〒452-0931 愛知県清須市一場519
TEL : 052-409-3311
大学HP : <https://www.yuai.ac.jp/>
編集者 愛知医療学院大学 附属図書館